一橋大学創立

150年史準備室

NEWSLETTER

No.1　2015.3

Since 1875

HITOTSUBASHI UNIVERSITY

一橋大学創立 150 年史準備室

ニューズレター

No.1　2015.3

一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY

一橋大学創立 150 年史準備室ニューズレター

No.1 ■ 2015.3

Contents

はしがき 1

斎藤 修　一味違った学問史を 2

西沢 保　福田徳三とその「著作集」の刊行に向けて 10

江夏 由樹　一橋大学における「学問史」編纂の歴史 21

大場 高志　学園史刊行の歴史 30

大場 高志　平成 26 年度学園史資料室の業務概要と課題 36

編集後記 40

はしがき

一橋大学創立 150 年史準備室長
江夏 由樹

一橋大学は 2025 年に創立 150 周年を迎える。2014 年 4 月、その準備のために、「一橋大学創立 150 年史準備室」（以下、「準備室」と記す）が小平研究保存図書館のなかに設けられた。これまで地道に活動を続けてきた「学園史資料室」と連携するなかで、準備室は創立 150 周年の記念事業に向けた作業に着手している。本ニューズレターの刊行もその一つである。

創立 150 周年事業を本格的に展開していくうえで、ここでは、次の二点を確認しておきたい。第一に、記念事業を推進する大学としての体制・組織の整備である。現在、準備室には特任教員 1 名、学園史資料室には契約職員 1 名が配置されているが、その学内における制度的位置づけは必ずしも明確でない。まずは、大学執行部の責任のもとに、創立 150 周年記念事業推進のための正式な委員会を立ち上げることが急務である。150 周年までに残されている時間はわずかに 10 年である。大学が明確な方針を提示し、その方針を機動的に具体化するための体制の確立が期待される。その際、100 周年の記念事業の経験を活かし、大学の教職員だけでなく、本学卒業生が 150 周年記念事業のなかで重要な役割を担うこと、具体的には、如水会との密接な連携関係を構築していくことが強く望まれる。

第二に、「150 年史」の編纂を進めるうえで、大学の所蔵する一次資料の蒐集・整理・編纂、そのための大学文書館の設立が課題となってくるであろう。例えば、創立百周年記念事業においても、大学資料の蒐集・整理は精力的に行われており、その成果として、大学、如水会の編纂による一連の資料集の刊行が行われた。大学史に限らず、歴史は様々な視点から、多様に検証されるものであり、そのためにも一次資料の蒐集・整理を怠ってはならない。「公文書管理法」の成立等を契機として、近年、多くの有力大学では大学文書館の設立、そこでの歴史編纂が進んでいる。本学の場合、すでに、文書館設立のための十分なスペースが小平研究保存図書館の内部に確保されている。本学の歴史が日本近代史の歩みと深く関わっていることを考えても、一橋大学における文書館設立は急がなくてはならない課題である。

本ニューズレターは、今後、150 周年事業に向けての情報交換の場として、その役割を果たしていくであろう。本誌への寄稿を快諾してくださった斎藤修名誉教授、西沢保名誉教授に深く感謝したい。斎藤教授が、附属図書館長を務められていた時代から、大学文書館設立の必要性を呼びかけていたことは、「編集後記」にある通りである。また、本誌の編集・刊行については、附属図書館に大変お世話になった。記してお礼を申し上げたい。

一味違った大学学問史を

斎藤 修
（一橋大学名誉教授）

I

いまから 20 年前、『一橋大学百二十年史――captain of industry をこえて』が刊行された。四六版で 280 頁ほどの大きさであるから、けっして大きな書物ではない。通常の大学史のイメージとは異なった造りである。しかし内容的には、知的関心をもつ読者にとっても魅力ある、またリーダブルな通史であった。そして、非売品であったその刊行物の英語版が、創立 125 年を記念するかたちで Macmillan 社より出版されたことも画期的なことであった（Ikema et al. 2000）。

私は本学の出身ではないが、この『百二十年史』はただちに読み始めた。そして、読了してとてもおもしろいと感じた。本学の卒業生なら皆知っている明治中期の校長排斥事件、申酉事件、籠城事件、白票事件といった戦前の出来事がどのような状況下に何をめぐって起きた紛糾であったのかを、学外者にもわかるかたちで書いてあるからだけではない。それらの事件の根底に、本学の一貫した志向がみられること、それは商業教育のコレッジとして出発しながらも、リベラルな教養主義とその教育にも高い価値をおき、それゆえに大学への昇格、単科大学から社会科学の総合大学への転身を目指した、百年を超える歴史があったことを理解したからである。

一橋大学は 2025 年に創立 150 年を迎える。このたび一橋大学創立 150 年史準備室が設置されたのも、またこのようなニューズレターが発行されることになったのも、その歴史の節目に大きな意義を認めているがゆえにちがいない。

大学史は一般に、創設の経緯や由来、その後の発展と変貌を制度・組織・人事面から明らかにするものと理解されている。その過程で生じた方針や路線をめぐる論議・対立、収拾・解決、転換・発展の過程を明らかにし、現代へいたる道のりを跡づけ、将来への糧とする役割が期待されているのであろう。大学の周年事業の一環として編纂されることが多いのも、それゆえと思われる。『百二十年史』は――小著とはいえ――その意味における大学通史としての役目を立派に果たしたといえるであろう。

しかし、それと同時に、大学史には学問史という側面もある。そういう視点からみたとき、『百二十年史』は何を教えてくれるであろうか。

II

そのためにまず、戦前に確立されたという「リベラルな教養主義」という理念が学問史からみて何を意味していたのかをみてみたい。

『百二十年史』は、この理念の形成を大正デモクラシーと関連させて次のようにいう。大正デモクラシーとは、政治運動にとどまらず、その主張のうちには「経済的には資本の国家からの自立化であり、学問的にはアカデミズムの国家に対する自律的価値の主張であり、「教養」の自己目的性を強調する教養主義の確立とその結果としての大学の自治の確立」を含んでいた（米倉 1995、91 頁）。それゆえ、「第一次大戦期から昭和初期にかけて本学に形成された学問的主流は、... 自由主義・マルクス主義的な思想イデオロギーを重視した経済思想・哲学と歴史学派の伝統を統合したような、まさに正統派教養主義」だったのである（同、86 頁）。

これは国家社会との関係における特徴づけである。大学の内部に目を転ずれば、「社会啓蒙的な経済原論や歴史学派の伝統に裏づけられた経済史および商業史、さらには上田流の実業と学理の融合を目指した新自由主義から大塚金之助のマルクス経済学ときわめてリベラルな教養主義的学風が商学とならんで、あるいは商学を凌駕する形で成立していた」という（同、93 頁）。商業学校のカリキュラムと教授陣としては、たしかに相当にハイブラウであった。

ここで、「社会啓蒙的な経済原論」という言葉が福田徳三を念頭においていることは間違いない。大正デモクラシーの運動の中核にいたからである。しかし、それだけでは、福田が教えていた経済学がどのような内容であったのか、それが「経済史および商業史」のバックボーンにあったとされる歴史学派の学問とどういう関係にあったのか、また上田貞次郎の「新自由主義」（昨今の neo-liberalism ではない）との関連はどうなのかはわからない。さらに、「大塚金之助のマルクス経済学」は正統派のマルクス経済学と同じなのであろうかという学問史的疑問に応えるものでもない。

もう少し具体的にみよう。明治大正期の日本の大学における経済学は多分にドイツ歴史学派的であった。帝国大学だけではなく、他の大学においても想像以上にドイツ的であったらしい。アメリカ人の教授が経済学を教えた場合でも、当時のアメリカがドイツ派の影響下にあったので、しばしば歴史学派的なカリキュラムとなったといわれている。一橋でも、多くの教授がドイツへ留学をした。『百二十年史』の第 1 編第 2 章にある一覧表からは、留学を命ぜられたものの大半がヨーロッパ大陸へ行ったこと、そのなかでもドイツが最大の留学先であったことがわかる（中村 1995、51-52 頁）。

福田もその一人であった。彼が新歴史学派のブレンターノに師事し、その下で『日本経済史論』の学位論文を書いたことはよく知られている。しかし、彼の経済学が「一方の足を L・

ブレンターノ、他方の足をA・マーシャルにおいていた」（荒 1986、283 頁）ということは必ずしも周知のこととはいえないのではないか。彼が 1909 年に刊行した『経済学講義』はマーシャルの「祖述的研究」であったが、福田自身は 1904 年に高商を飛び出しており、1905 年から 1919 年まで慶應義塾で教鞭をとっていた（その間、原論の教科書にマーシャルの『経済学原理』を使ったことが明らかにされている）。1904 年までの高商における福田の原論講義はどの程度にドイツ歴史学派的で、いつからマーシャルが登場したのであろうか。あるいは、1918 年に復帰してからの講義内容はどのように変わっていたのであろうか。また、マーシャルの翻訳は福田の「指示」で大塚金之助が始めたものであることが『百二十年史』の記述にみえる（尾高・松田 1995、155 頁）。明らかに一橋はマーシャル経済学導入に重要な役割を果たしたのであるが、福田以後、商科大学時代の原論講義はどの程度にマーシャル的であったのだろうか。

これは、上記の引用文にあった「大塚金之助のマルクス経済学」の解釈にも影響するかもしれない。実際『百二十年史』では、大塚が「むしろ近代経済学の潮流のなかにいた」可能性すら示唆されている（同、155 頁）。

『百二十年史』は、上記引用に続いて、このようなリベラルな教養主義の伝統が戦後における（たとえば経済同友会の）「修正資本主義」的発想へ影響を与えたのではないかという、注目すべき発言をしている（米倉 1995、94-95 頁）。戦争直後の経営者や官僚は戦前期に大学教育を受けたのであるから、これは興味深い議論である。ただ、「修正資本主義」的政策にはケインズ経済学が欠かせない。一橋の場合、ケインズの『一般理論』はいつから研究され始め、いつごろから誰によって授業でどのように教えられるようになったのであろうか。前者の問いについては、専門家であればすでにある程度の見通しが得られているのではないかと思うが、後者にかんしてはどうであろうか。

いずれにせよ、戦前期一橋の経済学は、他大学に比して早くドイツ歴史学派の影響から脱却したのではないであろうか。

Ⅲ

以上は経済学の学問史であった。先の引用文に「歴史学派の伝統に裏づけられた経済史および商業史」と書かれていた、歴史学の場合はどうであろうか。

『百二十年史』は戦時体制下の学問を扱う章で、困難な状況で「学問研究を、［当時対立していた］マルクス経済学と皇道経済学とを超えたところにおくのを可能にした」実証的な研究として、経済史をあげている。「幸田成友が担当した「日本経済史」の講義は、日欧交渉史を踏まえ、商都大阪の実証研究とも結びつく内容であった。この点は、三浦新七や村松恒一郎の研究スタイルとも類似点があり、ドープシュの弟子で、ドイツ近世史［中世史］家

でありながらも高岡高商との縁で富山売薬史資料をまとめた上原専禄（専門部）の学風につながるものであった。これらの人たちは、当時の日本の日本経済史研究がマルクス史学の影響を色濃く受けていたのに比べて、むしろ歴史主義の影響が強かった」（尾高・松田 1995、155-56 頁）、と。

戦時下における一橋の学問の評価として、これは非常に興味深い指摘である。ただ、史学史（歴史学の学問史）としてみたとき、幸田の実証史学と三浦と彼の教え子たちの研究スタイルの違いも重要である。

近代日本史学における実証研究の方法は、清朝の批判的文献学の影響を強く受けた幕末考証学の伝統と、明治になってルートヴィヒ・リースが東京帝国大学史学科で教えたドイツ流の史料批判学とが融合したものであった。後者はしばしばレオポルト・フォン・ランケに始まる近代歴史学の方法を導入したといわれるが、リースの講義は史料批判を中心とした研究法に限られ、史料からどう歴史的総合へと纏めあげるかのスキルは日本の学生には伝えられなかったようである。結果として、概念化の面では素朴で、しかし実証的には綿密な学風が定着することとなった（このスタイルはマルクス主義史学を標榜する歴史家にも浸透し、彼らからも実証レベルの高い個別論文が生産された）。この学派の第一世代は重野安繹や久米邦武であり、幸田成友も東大においてはリースから直接教えを受けたので、その第二世代といってよいであろう。一橋では、1934 年から 7 年にわたって日本経済史の講義を担当した。

これに対して、三浦新七の学問は異なった流れのなかから形成された。三浦のドイツ留学の直接の目的は商業学研究のためであり、また学生時代に興味をもった歴史もリストやビュッヒァーを介してであったが、留学先のライプチヒ大学では、歴史家ランプレヒトの下で９年にわたって研鑽を積んで帰国した。ランプレヒトは、歴史主義の流れから完全に抜け出たわけではなかったが、ランケ以来の伝統的なドイツ歴史学の政治史中心主義を批判、歴史家が経済史や他の社会科学分野の歴史を研究対象とする途を切り拓き、それによって異文化間の比較文明史を構想した。三浦が吸収したのはランプレヒトのこのような学風と比較文明史であったが、上記引用文にもあったように、彼の教え子上原専禄が留学先のウィーンで西欧中世史の厳密な実証作法を学び、その後の一橋における、実証的で、対象地域の文化にも十分に目配りをした外国史研究の礎を築いた。

このように、幸田の考証史学と三浦門下の実証史研究にはかなり肌合いの違いがあった（ただ、両者は背反的な関係にあったわけではなく、増田四郎のように幸田ゼミから三浦門下となった例もある）。その違いを前提とした上で両者の共通点をあげるとすると、意外と「歴史学派」的でなかったことであろう。少なくとも両大戦間の時代までには、ドイツ歴史学派経済学やマルクス史学的な意味での発展段階論的色彩が弱くなっていたのである。この傾向は理論研究の場合と近似しており、戦前期一橋の学問の、これまであまり注目されて

こなかった特徴の一つのように思われる。

これはたしかに意外である。福田の歴史学派的著作『日本経済史論』がもったインパクトは間違いなく大きかったであろうからである。ただ、一橋のなかでそのインパクトを正面から受けとめたのは、経済史を専門とする歴史家というよりは、上田貞次郎のように政策関連の分野の研究者だったというのが正確なところかもしれない（土肥 2004）。ただ上田も、英国の産業・労働の研究から英国の「新自由主義」（19 世紀後半から 20 世紀にかけて登場した new liberalism、すなわち自由放任ではなく社会的公正を重視する自由主義）へと辿りついたのであった。

IV

以上は、『百二十年史』を読んでの私の個人的な感想、それもやや穿った感想にすぎない。それから半世紀近くたったいま、創立 150 年を記念して再び大学史を編むのであればどのような大学史が可能なのか、その具体的な企画案づくりは担当の方々に任せるとして、ただ『百二十年史』の学問史版がいつかは欲しい、それもできれば戦後までカバーした学問史があるといいと思うがゆえの、問題提起的メモであった。ここで、さらにもう一つ希望を述べることが許されるならば、新たな大学史編纂のための事業として、学生のとった講義ノートを組織的に収集することを提案したいと思う。

もちろん、学問史はすでに存在する。分野ごとに過去の主だった教授の学問と業績が詳述された、1,000 頁を優に超える『一橋大学学問史』である。ただ、それは公刊された論文や著作と、そこに反映された研究内容に焦点を当てた記述である。しかしそれだけでは、何がどの科目で講義されていたのかを知ることはできない。先に提起した問題、たとえば「商科大学時代の経済原論講義はどの程度にマーシャル的であったか」とか、「ケインズの『一般理論』はいつから誰によって教えられるようになったのか」とかいう類の問題への解答は、『一橋大学学問史』の叙述からは得られないのである。それどころか、学説史の専門家であっても自信をもって答えることは難しいのではないか。いいかえれば、教育の場において特定の学問がどのように教えられていたかを掘り起こすのは容易ではないのである。

講義ノートは、その解答を得るための手がかりとなる。聴講していた学生のノートが、後の学説史ないしは思想史研究者にとってきわめて貴重な資料となるケースはすでにいくつかある。アダム・スミスが『道徳感情論』と『国富論』との間にグラスゴー大学でおこなった法学の講義は、彼の死後一世紀もたってから発見され、『法学講義』というタイトルで翻訳もある。スミスが法学にかんする著作をついにまとめなかっただけに、彼の思考がどう発展していったかを跡づけるうえでも、また彼の考える社会科学体験の全貌を再構成するうえでも、貴重な発見といわれている。もう一つの例は、マクス・ウェーバーの『一般社会経

済史要論』である。これもウェーバーが死の前年にミュンヘン大学で行った一般経済史講義を聴講していた学生のノートが発見され、それが出版されたものであった。

一橋でいえば、三浦新七『文明史特別講義』と題された、増田四郎の受講ノートがこのカテゴリーに入るであろう。1934 年に行われた特別講義で、手書ノートを起こしたファイルが附属図書館のウェブサイトにアップロードされている。「極めつきの寡筆」といわれ、ついに体系的な著作を遺さなかった三浦の文明史構想がわかるという意味においても、そして増田自身が何度か書いているように、歴史学へ転身した三浦の知的バックグランドがどこにあったのかを垣間みることができるという意味でも、きわめて貴重な資料である（山田 1986；増田 1967）。

もう一つ、増田のノートほど知られていないが、1942 年入学の佐々生信夫が残した一連のノートも貴重である。佐々生は卒業後の 1944 年から敗戦直後にかけて、東亜経済研究所（現経済研究所）の調査員の職にあり、惜しくも事故死した研究者で、残存するノート類の冊数が 45 と膨大なことが特徴である。

尾高煌之助は、そのうち中山伊知郎と山田雄三両教授の講義内容を精査し、経済理論の需要と研究、その授業への反映について興味ある観察をしている（尾高 2008）。中山の経済原論については、「一般均衡の仕組みの具体的な解説、消費者行動の理論を J.R.ヒックス流の無差別曲線を使った説明など、1960 年代の米国一流大学の後期専門課程の経済原論講義にも匹敵する充実した内容を備えていた」。一方、山田の授業は統制経済と計画経済をとりあげている。そこでは、「日本における統制経済は、所有権や市場取引を前提にした上で市場の力を管理しようとするところにその本質があり、その意味で（ソ連における）社会主義とはまったく異なることを指摘した上で、経済的自由主義の下で生ずるさまざまなデメリット（分配の不平等、失業、貧困問題など）を、市場のコントロールによって適切に改善するときにはより高い経済的厚生を実現し得るという意味で、19 世紀資本主義よりもはるかに優れた側面をもち得る点を、一般均衡の視点から論ずる。議論の過程では、ハイエク、フォン･ミーゼス、オスカー･ランゲ、ケインズ、ピグーなども登場し、当時の欧米経済学の先端的業績を把握していることがよく伺われ、しかもマクロ的概念（国民所得など）を利用して説明が展開される。これらの研究は、同氏が大戦直後の日本において理論経済学のギャップを埋めるのに多大な貢献をする基盤を構成したものと評価できよう」。

佐々生文庫には聴講ノート以外も含まれている。たとえば、佐々生が出席した東亜経済研究所（現経済研究所）における日本の国民所得についての研究会報告筆記も残されており、それについても尾高は別の箇所で言及している（尾高 2010、96-97 頁）。いずれにせよ、講義ノートを中心とする佐々生文庫は、戦時下の学問と教育の実態を知る上でさまざまな可能性を秘めた資料群なのである。

附属図書館の『鐘』第45号には「アーカイヴィングの進捗状況について」という記事が

あり、「本学に所縁のある研究者等が遺したノート、原稿類、研究教育資料等」のアーカイヴを構築する事業について述べられている。このうち「ノート」類のなかにそれら研究者が学生のときの聴講ノートも含まれているであろう。ただ、その授業はあくまでも「本学に所縁のある研究者」を対象としていて、私がいまここで呼びかけようとしているのは少し狙いが異なる。

私が考えているのは、人物主体の学問史というよりは学問の流れがよくわかる学問史である。そのためには、普通の学生がとった昔の講義ノートをなるべく多く収集することが有効なのではないであろうか。さまざまな年代のさまざまな講義のノートがたくさん集まれば、公式の授業科目と担当者一覧からではわからない、また研究者が学術誌に発表した論文や著書からででも必ずしもわからない、どの学説がいつから学生に教えられるようになったのかを明らかにできるからである。それが先に述べたような疑問、すなわちドイツ歴史学派からマーシャルへ、マーシャルからケインズへという変遷、あるいは経済史における発展段階論的影響に有無などについての問いに答えることを可能とし、一橋の学問が日本の近代社会科学発達史のなかでどのような役割を演じ、またどのような特色があったのかをいっそう明瞭とさせるであろう。それに加えて、『百二十年史』においては弱かった戦後の学問史を執筆するための格好のデータベースをも提供してくれるにちがいない。

引用文献

荒憲治郎「近代経済学」『学問史』（1986）所収.

尾高煌之助「戦時体制下の学問と教育」，如水会フォーラム『戦時体制下の学問と教育』7/8（2008）.

尾高煌之助・西沢保編『回想の都留重人』（勁草書房，2010 年）.

尾高煌之助・松田芳郎「戦時体制下の学問と教育」『百二十年史』（1995）第 2 編第 3 章.

土肥恒之「大正期の欧州経済史学と「福田学派」」『一橋論叢』第 132 巻 4 号（2004）.

中村政則「大学昇格への前史」『百二十年史』（1995）第 1 編第 2 章.

一橋大学学園史刊行委員会編『一橋大学学問史』（一橋大学，1986）.

一橋大学学園史刊行委員会編『一橋大学百二十年史——captain of industry をこえて』（一橋大学，1995）.

一橋大学附属図書館「アーカイヴィングの進捗状況について」『鐘』第 45 号（2003 年）.

増田四郎「三浦新七先生の文化史研究」『歴史する心』（創文社，1967 年）.

山田欣吾「西洋史」『学問史』（1986）所収.

米倉誠一郎「第一次世界大戦・大正デモクラシー期の一橋」『百二十年史』（1995）第 1 編第 4 章.

Ikema, M., Y. Inoue, T. Nishizawa and S. Yamauchi, eds., *Hitotsubashi University, 1875-2000* (Basingstoke: Macmillan, 2000).

福田徳三とその「著作集」の刊行に向けて

西沢 保
（一橋大学名誉教授）

１．はじめに

数年前から学内の数人の方を中心に福田徳三研究会という小さな研究会を行ってきた。これは、当初、学問史研究会という名称にしようという話もあったが、私的な研究会なので、公的な響きがある学問史研究会ではなく福田研究会という名称にしたという経緯があったように思う。研究会に関係する方は、学問史・大学史に関わる資料の整理、デジタル化等、その側面については実質的にアーカイブズをつくっていくような方向で努力をかさねられてきたように思う。

そうしたなかで最近になって、出版社、研究会の関係者の多大なご支援・ご協力のもとに、「福田徳三著作集」を刊行するための初期的な準備作業が進められている。ここでは、一橋の学問史における福田徳三とその「著作集」刊行の準備状況について記したい。

２．「生存権の社会政策」と「厚生経済」

一橋における広義の経済学を中心とする学問史の源流はしばしば福田徳三に求められる。たとえば、戦後間もない 1948（昭和 23）年に恩師でもある福田の『生存権の社会政策』を編集・刊行した赤松要は、後に一橋の経済思想の伝統を語るなかで次のように述べている。「その先行者はありますが、アダム・スミスが世界の経済思想史において巨峯であり、そこから出発してもよいと同じ意味で....、日本では福田徳三から出発することにしてもよいかと思うのです」と（赤松 1960、89）。「生存権の社会政策」は、福田の思想の一つのコアとも言えるが、もともと福田自身のまとまった著書としてあったわけではない。明治中期以降の社会政策論の第一期を担った金井延の記念論集『最近社会政策』（大正５年）に、第二期の社会政策論の哲学として、その基礎に生存権を置こうとして書いた論文が「生存権の社会政策」（福田徳三『経済学全集』第５集所収[1]）であった。福田は明治の末期から「生存権」に着目し、アントン・メンガーの教えとともに、社会権としての労働権、労働全集権、生存権を主張してきた。赤松はこうした論

[1] 福田徳三『経済学全集』全６集８冊、同文館、1925-1926 年。以下、福田の著作からの引用は基本的にこの『経済学全集』からとし、本文中に集数とページを記す。

考に、福田の代表作の一つである『社会政策と階級闘争』（大正 11 年）の第 1 部「社会政策序論」を加えて『生存権の社会政策』として刊行した（赤松 1948）。

その「編者序」の冒頭には、「社会問題の先覚者としての博士の業績が今日の時代になお脈々たる生命をもち、時代を指導する先進性を有する」とある。これは、「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」を謳った日本国憲法発布から間もない時期であったが、赤松は、「労働権、生存権は今日のわが新憲法の下に半ば認められてきたのですが、いまだ生存権の確保というような段階は遠い将来に属することでしょう」と書いている（赤松 1948、6）。この『生存権の社会政策』は、その後、福田の最後のゼミ生（「掲示場だけのゼミナリスト」）となった板垣与一による新訂版として、講談社学術文庫（昭和 55 年）に収められ、「社会政策の古典的名著」とされた（板垣 1980）。

講談社学術文庫にはもう一冊、やはり福田門下生で福田の「最後の助手」（大学補手）を勤めた山田雄三編の『厚生経済』がある。福田には遺作となった大著『厚生経済研究』（1930 年）があるが、これは福田が目指した厚生経済学あるいは福祉の経済学のまとまった書にはならず、最初のいくつかの論文はいわばその「序曲」であった。山田は、それらを含む福田の 5 つの論考を選んで『厚生経済』を編み、「『厚生経済』の先駆的研究」という序を付し、解説では「厚生経済」研究における福田の「遍歴」を書いている（山田 1980）。福田は「厚生経済」と「社会政策」をよく併用するが、「厚生経済という考え方は経済学を初めて以来多少はもっていた」（福田 1930、2）。実際、それは高商の学生時代の「修学旅行報告書」にも見られるし、処女作とも言える恩師ブレンターノとの共著『労働経済論』（1899 年）にも顕著である。福田が慶應義塾での講義のために書いた『経済学講義』はマーシャルの『経済学原理』を基礎にしているが、その『原理』第 1 編は「厚生経済学の大宣言」ともみるべきとされ、福田はピグーの『厚生経済学』にも多くを学んだ。しかし、新古典派の「価格の経済学」に満足できず、人の生、「生を厚くする」厚生経済を求めて、「生こそ富」というラスキンの公理を受けたホブソンの人間福祉の経済学に拠り所を求めた（西沢 2014 参照）。福田の教えを自らの経済学研究の出発点にした中山伊知郎も言うように、福田は「倫理的な意味の厚生経済学に最後の立脚地」を求めた（中山 1978、39）。

『厚生経済研究』の最初の大論文は「アリストテレスの『流通の正義』と共産原則」であるが、「各人からはその能力に応じて、各人へはその需要に応じて」という共産原則は、余剰の生産、交換、分配の一切を通じて「一本の赤い糸のように」、資本主義社会の機構の中に折り込まれていると福田は考えた。「配分の正義を厚生の原理とするロシアの社会」、あるいはマルクス主義その他の社会主義と、「流通の正義を厚生の原理とする我々の社会」すなわち資本主義社会を比較し、「［流通の正義の］長所を助長し行くことが配分の正義の樹立よりも、はるかに肝要のことではあるまいか」として、流通の

正義を厚生の原理とする資本主義の中に、配分の正義を厚生原理とする共産原則がしだいに形成されていると福田は論じた（福田 1930、340-41）。

さらに、「資本主義社会は、その階級闘争により、その『労働協約』により、その『最低または生存賃金』により、その労働保険その失業保険により、しかしてまた、その資本主義的国家および公団体の租税、公課と、しかして、諸々の公企業、公営造物により、『剰余価値闘争』を、漸次に展開せしめつつある」（同 178-79）。こうして実現されていく社会的厚生・福祉の増大という考え方は、山田雄三が言うように「福祉国家」の主張であり、福田がホブソンとともに言う「ニードの原則」、そのための「余剰の社会化」は、後に都留重人が言った「フローの社会化」「サープラスの社会化」（都留 2003、62-64；2004、47-48）という考え方に繋がるように思われる。福田の厚生経済＝社会政策論は、狭義の厚生経済学というよりも広義の福祉経済論であり、福祉の経済社会学は一橋の経済学に流れる一つの大きな学統のように思われる。

準備中の新しい「福田徳三著作集」でも、『社会政策と階級闘争』『生存権の社会政策』『厚生経済研究』などは、その一つの柱になる予定である。前２著は、後述するように、福田が自ら編集した『経済学全集』第５集「社会政策研究」に収められている。また、第６集「経済政策及び時事問題」所収の『黎明録』『暗雲録』のように、第一次大戦後、ロシア革命後の「改造」の時代に書かれた、いわば福田の資本主義・社会主義・民主主議論とも言える時論、および関東大震災を受けて書かれた『復興経済の原理及び若干問題』など現代社会にも関係するようなものは、今回の新しい著作集でも比較的早期の出版、できれば今秋ないし年内の出版が計画されている。

３．福田の経済学研究の概要と評価

福田は、多くの人が言うように、日本における経済学研究の大きな原点であり、経済学研究の基盤を構築し、「母体」を形成した。ブレンターノと共著の『労働経済論』（1899 年）から遺作となった『厚生経済研究』（1930 年）まで、ほぼ 30 年間の著作活動であったが、経済学原論（概論）、経済学史、経済史、経済政策、社会政策を中心に、単行本 37 部、全集１部、定期刊行物、論集、辞書等に掲載された論稿約 300 篇の多きに達した（山田 1955、2：坂西 1933、4）。

雑誌『改造』に河上肇とともに福田の追悼文を寄せた慶応義塾の小泉信三は、「ただ独り博士の学問の開拓者、先進者として後進を刺戟し奨励するその特殊の才能と非凡の性格とに至っては遂に比類を見出し得ぬ所であった。この点でわが国の経済学はたしかに福田博士に導かれて来たといって差し支えない」と述べた（1930 年６月号）。小泉に

よれば、経済学の大概の領域は福田によって開拓され、大概の大問題は福田によって提起されたか、重大化されてきた。経済史、経済理論、経済思想史、社会政策、マルキシズム、株式会社研究がそうであった。福田の業績の重要なる一部は西洋学説の紹介で、「その真価は熱情ある紹介によって幾多の西洋学説を移し来って真実のわが国学問の財産たらしめた」ことにあった。それは、日本の経済学の諸分野における「先駆者的・基礎工事的努力」であって、将来にむかって不滅の業績として輝きを放つであろうとも言われた（上田辰之助、第 2 巻、593）。日本における理論経済学、数理経済学の歴史も、その起点は福田に求められ、安井琢磨が言うように、福田は日本の数理経済学研究の「母体または温床」となった（安井 1942、740）。

福田による広義の経済学研究は多岐にわたり、福田の教えを受けて研究者になった人は多い。「天才的な把握の力、人の意表に出づる着想、寸鉄骨を刺す批判、閃光透徹する洞察力」をもった福田は、その「深き蘊蓄と徹底せる論理、気魄と能弁」によって、教壇を通して、そして教壇を出でて、「聴講者に刺激と発奮を与え、彼らの間に学問討究の精神をみなぎらせた」という（赤松 1980、196：坂西 1933、3）。もう一つ、慶應義塾で教えていた明治 40 年に出た「大学とは何ぞや」という一文（『三田評論』42、明治 40 年 7 月 1 日）は、彼の学問論の一端を直裁に表現しているように思われる。

> 大学とは学問のために学問をする所である。実業学校は飯食術を教える。いわゆる専門学校は専門を教える。皆学問は一の方法だ、それ自らの目的ではない。これに反して大学は学問が最終の目的だ。それでよりよく飯が食える様になると否とは、各自の工夫にある。大学の－とくに大学教授の－直接に関係する所ではない。これが大学の目的である。
>
> 教えるも自由、学ぶも自由、……自由なる教授、自由なる学生、而して自由なる相互の研究これが大学の生命である。
>
> したがって教授も学生も自由に学問を研究する所でなければ大学でない。これが大学の職分である。
>
> まず第一に教授とは学問を研究する人をいう。講釈をするのは二の次の職分である。講釈をせずとも大学教授たるに於て差し支えない。……その研究するのは、教えるためでない。本を書くためでない。……世のためになるか、否かは末の事である。何のためという束縛を受けず、ただ学問のために学問を研究するのである。……

４.『経済学全集』とその後

福田は、その活動がおそらく最も華やかであった頃、自らの『経済学全集』の刊行を

企画した。それは奇しくも関東大震災の直後であった。震災後に多少とも落ち着いて勉強を始めた 1924（大正 13）年春に、恩師ブレンターノの 80 歳を祝賀し、またその蔵書の購入資金を得るということもあって、全集の刊行を企画した。彼はその時 50 歳を迎え、翌 1925 年３月から帝国学士院代表として２度目のヨーロッパ派遣を控えていたが、最初の留学中にブレンターノと共著で刊行した処女作『労働経済論』以降 25 年間における学問上の総決算をし、恩師に捧げようとしたのであった[2]。全６集８冊および『総索引』、四六版で 11,645 ページにおよぶ『全集』は、1925-26 年に同文館から刊行された[3]。それは、おそらく個人による日本で最初の『経済学全集』ではないかと思われるが、彼の経済学研究の骨格・輪郭―理論・歴史・政策―を示している。今回の新しい著作集も基本的にこの福田が自ら編集した『経済学全集』を底本にしている。

その第１集『経済学講義』および第２集『国民経済講話』は、経済学原理・経済学概論―理論、第３集は『経済史・経済学史研究』―歴史、第４集『経済学研究』は論文集、そして第５集が『社会政策研究』、第６集は『経済政策及時事問題』―政策であった。それ以前に出版された福田の論文集である『経済学研究』（『続経済学研究』『改訂経済学研究』）、『経済学考証』（『改訂経済学考証』）、および『経済学論攷』は、概ね『全集』第３、４、６集に改訂して収録された。社会政策・労働経済・厚生経済のような福祉の応用経済学は概ね第５集を中心にしている[4]。

福田は、この『経済学全集』のすぐ後に『流通経済講話』（1925 年５月）を出した。『流通経済講話』は『国民経済講話』（総論及び生産篇（労働経済講話、資本経済講話）、

---

[2] 『経済学全集』刊行の詳しい経緯は、第１集の序（1924 年 12 月 18 日付け、ブレンターノ 80 歳の誕生日）を参照。『流通経済講話』序言９ページも参照。また、ブレンターノ文庫購入の経緯については、第１集序、6-8 を参照。同文庫は福田の旧蔵書とともに、大阪市立大学学術情報総合センターに所蔵されている。

[3] 『全集』は福田の滞欧中に刊行された（正確には、第１集の 1925 年３月 12 日から第６集の 1926 年 11 月 25 日までで、『総索引』は廉刷版とともに 1927 年に出版された）。第２集の初校までは福田自身がやったようであるが、その他の校正は大野隆が行った。第３集以下は、出発までに「悉く原稿の整理を終り得るつもりであるが、印刷の校正は勿論一切の後事を挙げて大野隆君に託して行くつもり」である、と福田は第１集の序（1924 年 12 月 18 日付け）に書いている（第１集序、13-14）。なお、翌 1925 年３月、渡欧の船中で書かれた『流通経済講話』序言（３ページ）には、従来の序文は「一つの drudgery として、遮二無二書き上げたもの」で、とくに「経済学全集の序文の如きは、目の回るような忙しさの間に、押し付けられるような感じをもちつつ起草した」とあり、当時の多忙さを物語っている。

[4] 『経済学全集』の概要は以下のようである。第１集『経済学講義』（『経済学講義』『続経済学講義』『改定経済学講義』『国民経済原論』『経済原論教科書』）、第２集『国民経済講話』（総論、労働経済講話、資本経済講話）、第３集『経済史経済学史研究』（『日本経済史論』など経済史研究、「基督教経済学説研究」など経済学史研究）、第４集『経済学研究』（経済単位発展史研究、マルクス研究、株式会社研究を中心とする論文集、および『経済学論攷』、『現代の商業及商人』、『高等商業教育論』（翻訳）など）、第５集『社会政策研究』上下２巻（上巻は、『社会政策と階級闘争』、『社会運動と労銀制度』、『ボルシェヴィズム研究』、下巻は、企業・労働及社会問題、社会政策関係の論文集、ブレンターノとの共著『労働経済論』など）、第６集『経済政策及時事問題』上下２巻（上巻は、『黎明録』、『暗雲録』、下巻は、『経済危機と経済恢復』『復興経済の原理及若干問題』、関一との共訳『最近商政経済論』など）。

1917-19 年）の続編で、その第３分冊「資本経済講話」脱稿後、流通篇として書いていたもので、後に（福田の死後）『経済学原理』（流通篇・上下）として改造社版『経済学全集』第３・４巻（1930 年 10 月・12 月）に収められた[5]。ついで『唯物史観経済史出立点の再吟味』（1928 年）、『経済学原理』総論及び生産篇（改造社版『経済学全集』第２巻、1928 年：これは『国民経済講話』の改訂増補版）、そして最後、死のほぼ直前に遺作『厚生経済研究』（1930 年 2 月・3 月）が刊行された。福田が最晩年までこだわり格闘していたのは、『経済学原理』と『厚生経済研究』であった。

ここにも見られるように、福田には、おそらく河上肇への対抗意識もあって経済原論・経済学概論構築への営為があった。あるいは、改造社版『経済学全集』にも見られるように、それが創生期・黎明期の日本の経済学会の要請だったかもしれない（杉原 2001、72、86 注（２））。しかし同時に、福田は原論体系の構築者というよりも、処女作『労働経済論』に始まる多くの著作、「生存権の社会政策」、『社会政策と階級闘争』、『復興経済の原理及若干問題』、そして遺作となった『厚生経済研究』にも見られるように、「社会厚生のために一身を捧げたる一大学者」という、光よりも「果実」を求める実践の学、福祉の応用経済学者という側面がより強く― これは「経世済民の学」とも言えよう。

今回の新しい著作集では、既述のようにまず第一期に、福田の『経済学全集』の第５集、６集から、現代社会の問題にも関わる政策、時論から何巻かを先行させ、第二期には、広義の理論を中心に、第１集、２集から『経済学講義』『国民経済講話』、そして『流通経済講話』『厚生経済研究』などを刊行し、続いて歴史を中心に第３集から『日本経済史論』などの「経済史研究」、「基督教経済学説研究」などの『経済学史研究』、さらにその後は第４集から「マルクス研究」、「株式会社研究」などの刊行を順次計画している。

---

[5] 『流通経済講話』出版の詳しい経緯はその「序言」（それは 1925 年３月に渡欧するための船中で書かれた）に記されている。「資本経済講話」脱稿後、1918（大正７）年に書き溜めていた「流通講話」を全面的に書き直すことにし、1923（大正 12）年夏に箱根で全力を傾け、第２編に最後の仕上げをすべく改訂をしていた。そのときに、「唯さえグラグラ動く強羅館の 2 階の一隅なる私の部屋は、天地も崩れるかと思うばかりに振動し、私は右の手にペン、左の手に数葉の原稿用紙を持ったまま、慌てて 2 階を駆け下りて崖上の芝生の所まで逃げ出した」のであった。それが「関東地方をほとんど滅亡に帰せしめた大地震であったとは、2 日後に初めて知った。」震災後、福田が落ち着いて勉強を始めたのは翌 1924 年の春であった。その時に企画した『経済学全集』の原稿整理を完了し、「流通講話」の出版元である大燈閣の事情もあって、第３編以下は旧稿を修正して出版社に原稿を渡したのは、渡欧の出立に先立つ 50 日ほど前であった。初稿をもって乗船し、神戸までの航海一日で初校を終え、あとは大野隆に託した（9-11 ページ）。

５．象牙の塔を出でて

1930（昭和５）年５月に 55 歳の生涯を閉じた時、『如水會々報』（「福田徳三君追悼録」1930 年６月）は、福田の死を次のように悼んだ。これは福田の生涯・業績の特徴をよく表現しているように思われる。

> 君の学問上の精進は単に君の学識を進め君をして学界における最高地位を獲得せしめたるに止まらず、その母校東京高等商業学校をして他に先じて大学化せしむるにあずかって力ありき。母校ならびに慶應義塾大学の教授としては最も子弟の推服敬仰するところとなり、門下多数の逸材を輩出し、教化の功績また逸すべからず。.... とくに君が象牙塔内の智者たるに止まらず、つねに街頭に立ちて筆に口にその研究を発表し、また時弊匡救の運動にも関与せるごとき、これ君が性来の熱情の流露というべく、実に君は社会厚生のために一身を捧げたる一大学者にしてまた一大運動者を兼ねたるものというべし。

福田は留学中の「ベルリン宣言」（1901 年）でも知られるように、世界の動きのなかで高商の大学化を早くから唱えていた。また既述のように、福田は関東大震災に遭遇した。福田が、自らゲートルを巻き草鞋履きで学生を率いて実地にあたった職業調査・失業調査は、象牙の塔を出、街頭に立って時弊匡救の運動に関与する福田の姿を遺憾なく伝えている。関東地方を襲った大震災は、「端なくも、我等に、その力と勇気とを振い起さしむべき機会を与えた。私は、同学諸君の驥尾に付して、この試験[試練]に応ずべく、一方書斎内において、他方街頭に出でて、自分の微弱なる心力と体力の及ぶ限り、あるいは思索し、あるいは奔走し、あるいは調査し、あるいは勧説することを努めた」(第６集 序 13-14)。

この側面は最近ＮＨＫでも取り上げられたが[6]、福田は「営生機会の復興を急げ」「復興経済の厚生的意義」等の論説（『復興経済の原理及び若干問題』、第６集所収）で、「人間復興の経済学」を説いた。

> 私は復興事業の第一は、人間の復興でなければならぬと主張する。人間の復興とは、大災によって破壊せられた生存の機会の復興を意味する。今日の人間は、生存するために、生活し営業し労働せねばならぬ。すなわち生存機会の復興は、生活、営業及び労働機会 ―これを総称して営生の機会という― の復興を意味する。道路や建物は、この営生の機会を維持し擁護する道具立てに過ぎない（第６集 1944)。

[6] ＮＨＫ取材班編著『日本人は何を考えてきたのか』ＮＨＫ出版、2012 年、第４章.

福田は生存権の社会政策を主張してきたが、関東大震災ほどそれが切要だと感じたことはなかった（第 6 集 1938）。震災という非常事態のなかで所有権本位の社会制度の矛盾が露わになり、自然の勢いとして「極窮権」の発動を免れなかった。極窮権（right to extreme need）とは、人がその生存を極度に脅かされて極窮の状態に陥るとき、「その生存を維持するのに必要な有形、無形のものを収用する経済権」であり、「人の生存権が危殆に瀕するとき発動する本来権」であった（同 1934-35）[7]。

哲学者フィヒテは、生存権を第一義とする理性国家実現のために『封鎖商業国』（1800 年）を求め、「生きよ而して生かしめよ」と喝破したというが（第 4 集、1016-17）、「生きた人から成る社会、国家は、まずすべての人を生かしめ而して自ら生きなければならない。」これが先天命題であり、生存権の主張は、「大災を経ていよいよその緊切さを証拠立てられた不朽普遍の要求」と福田は言う（第 6 集 1939-40）。生存権とは、「すべての生存するものが平等にかつ完全に享有すべき最根本的、最本来的の権利である。国家社会はその中に生きる者に対して一様にこの本来権を認め、その主張を擁護すべき高き使命を有する。この高き使命を侵害する他の権利は、この使命の前には何等の権威をも有することはできない」（同 1938）。

こういう福田の強い主張の背後には財産国家への批判、「物を本位とし、財産を最高祭壇に祀る私法の解釈」、「物を見て人を屁とも思わざる半倒壊の民法」（同 1897）に対する過激な批判があった。それが関東大震災時の借地・借家権問題、「焼け跡のバラック問題」に顕著に表れた。借家権は借家の消失と共に消滅し、借家人に焼け跡の土地を使用し、バラック等を建設して居住を継続する権利はない、と解釈された。焼け残りの動産物件を処理するために留まることはできても、住むために半永久的の家屋を建てることはできなかった（同 1894、1897）。

福田は震災の渦中で、「経済復興は先ず半倒壊物の爆破から―『生存権擁護令』を発布し私法一部のモラトリウムを即行せよ―」という過激な論説を発表した。有形の復興が工兵隊による爆破から開始されたように、無形の復興も半壊半焼の造営物を国家大権の発動によって爆破することから開始されねばならない（同 1886-87）。すなわち福田は、国家がその最高権の発動によって、私法一部のモラトリウムを即行すべきこと、震火災地に対し、私法一部の適用を停止する広汎なモラトリウム勅令を発布すべきことを主張した（同 1901）。生存権、生活本拠権を擁護する住宅立法について、福田の主張の

[7] 福田は、米騒動の勃発を極窮権の盲目的発動とみて、生存権が保障されていないときに社会的騒乱が突発しうることを警告した。いわく、「極窮権の実行を絶断するの道は唯一、生存権の確実なる保障を第一義とする政治と法律の確立」なりと（「極窮権論考」『国民経済雑誌』1918 年 10 月、『全集』第 4 集、1051）。

一部は、借地・借家臨時処理法（1924 年）で受け入れられた（清野 2014）。

また、「復興経済の第一原理」は「営生機会の復興」であり、当面の第一の問題は失業問題であった。罹災した失業者は、生活及び営業 ―これを合せて「営生」という―の本拠たる場所と営生用の道具を失い、営生の源泉たるべき収入を失って、「強制的惰民」となっていた（第６集、1945-46）。復興事業の第一は、罹災者・失業者に対して営生の機会を回復し、「無形の財」を活用することであった（同 1961）。

> ［失業者・罹災者］は、有形の財物を失ったものである。さながら、彼らはいまだ無形の財物を全くは失ったものではない。彼らはそれぞれの職業において、多かれ少なかれ、それに適応した技能、適性、熟練、習慣性等を有していたものであって、それらは、彼らが今失業者たる間はまったく活用の機会を与えられていないものである。それらは、貴ぶべき無形の財物である。彼らの多くは、この無形の財物の活用、運用によって、有形の財物の消滅を、あるいは多くあるいは少なく、補償し行くべきものである。彼らが行くべき道は、この他に存しない。この無形の財物は、これを活用すべき営生の機会、これを適用すべき何らかの職業を見出すことによってのみ、財物たりうるのである（同 1831-32）。

福田は 1923(大正 12)年２月から内務省社会局参与を務めていたが、営生機会の確保としての失業防止の対案は、５月 31 日の中央職業紹介委員会で可決された職業紹介事業改善案（職業紹介国営要綱）に結実した（第６集序、21-24）。

６．おわりに

福田は、大学とは「学問のために学問をする」所であり、教授とは「学問のために学問を研究する」者だという「象牙塔内の智者」として数多くの逸材を輩出して、いくつかの学統の基礎をつくった。同時に、象牙塔内を出でて街頭に立ち、「時弊匡救の運動にも関与」し、「実に社会厚生のために一身を捧げたる一大学者にしてまた一大運動者」であった。こうした福田の営為は、福田の教えも受けたほぼ同世代の同僚で、福田よりも実学・政策寄りのやはり大きな学統の基礎をつくった上田貞次郎のよく知られた名文句の精神にも繋がるものがあるように思われる。

> 学者は実際を知らず、実際家は学問を知らず、政治は産業を離れ、産業は社会に背く、これ実に産業革命の波涛に漂へる現代日本の悩みではないか。吾人はこの混沌裡にあって、企業より社会を望み、社会より企業を覗ひ、眼前の細事に捉はれずまた空想の影を

逐はず、大所高所より滔々たる時勢の潮流を凝視して、世界における新日本建設の原理を探らんとする。

これは周知のように、壮年期の上田貞次郎が 1926 年 4 月に創刊した個人雑誌『企業と社会』(1926-28 年) の「宣言」である。福田の『経済学全集』の刊行とほぼ同じ時期である。福田が資本主義と社会主義の狭間で「第 3 の道」ともいえる福祉国家を追究したしたように、社会の進歩と社会理想の変遷に着目した「理想的現実主義者」上田は、『企業と社会』を通して、マルクス主義、国家主義が高揚する昭和初期の日本社会に向かって「新自由主義」を提唱した。それは洛陽の紙価を高めた『社会改造と企業』や『英国産業革命史論』で経営者及び新中産階級の社会的意義を強調した上田が、東京商科大学の黄金時代を背景に放った「実際論」としての 'Practical Idealism' 'Realistic Idealism' の表明であった[8]。学問の専門分野があまりに専門化・細分化されている今日、先学が築いた学問の伝統を振り返ってみることにも一定の意味はあるように思われる。

[8] 西沢 2001 を参照。『上田貞次郎日記 大正 8 年 - 昭和 15 年』108-9. 山中篤太郎「解説」(上田貞次郎全集 7 巻)。

参考文献

赤松要（1948）「編者序」、福田徳三著『生存権の社会政策』黎明書房.
―― （1960）「一橋の伝統における経済政策思想」『一橋論叢』44-1.
板垣与一（1980）同編福田徳三『生存権の社会政策』講談社学術文庫.
上田辰之助（1987） 『上田辰之助著作集』第 2 巻「トマス・アクィナス研究」
金沢幾子編（2011）『福田徳三書誌』日本経済評論社.
坂西由蔵（1933）「序」、『福田徳三博士追悼論文集 経済学研究』森山書店.
杉原四郎（1979） 「福田徳三と河上肇」『経済論叢』124 巻 5・6 号.
―― （2001）『日本の経済思想史』関西大学出版部.
清野幾久子（2014）「関東大震災後の福田徳三の生存権論の「転回」―借地借家臨時処理法（大正 13 年法律第 16 号）への理論的寄与の研究」『札幌法学』25 巻 2 号.
中山伊知郎（1978）「日本における近代経済学の出発点」、美濃口武雄・早坂忠編『近代経済学と日本』日本経済新聞社.
西沢保（2001） 「上田貞次郎の新自由主義・日本経済論」『日英交流史 1600-2000』(都築忠七他 編)「5 社会・文化」東京大学出版会.
―― （2007） 『マーシャルと歴史学派の経済思想』岩波書店
―― （2014）「厚生経済学の源流－マーシャル、ラスキン、福田徳三」『経済研究』65-2.
都留重人（2003）『体制変革の展望』新日本出版社
―― （2004）『科学と社会－科学者の社会的責任』岩波書店
福田徳三（1894）『群馬県附栃木県足利長野県修学旅行』（修学旅行報告書第 1 巻、1894 年 1 月）.
―― （1925）『流通経済講話』大鐙閣
―― （1925-26）『経済学全集』全 6 集 8 冊、同文館
―― （1930）『厚生経済研究』刀江書院.
―― （1960）福田徳三先生記念会『福田徳三先生の追憶』
安井琢磨（1942）「我国における理論経済学の発展について－「数理経済学」を中心として」『東京帝国大学学術大観 法学部・経済学部』1942 年.
山田雄三（1955）「福田博士の厚生経済学について」一橋大学一橋学会編『一橋大学創立 80 周年記念論集』上巻、勁草書房.
―― （1982）「福田経済学と福祉国家論―福田徳三先生歿後五十年にあたって―」『日本学士院紀要』37-3.
―― （1980）同編福田徳三『厚生経済』講談社学術文庫.

一橋大学における「学問史」編纂の歴史

江夏 由樹
（一橋大学経済学研究科特任教授）

１．はじめに

一橋大学は 1975（昭和 50）年に創立 100 周年を迎えた。その記念事業として、大学は「年譜」、「学制史資料」、「学問史」、「座談会記録」等の編纂・刊行を相次いで行った。また、如水会学園史刊行委員会の手によっても、一連の学園史資料の刊行が積極的に行われた。その歴史は、本ニューズレター所収の大場高志「一橋大学の学園史刊行の歴史」にある通りである。そうした記念事業のなかで、「一橋の学問」とはどのようなものであるのかという問いは、たえず、議論の中枢に据えられていた。

一橋大学創立 150 年の記念事業においても、「学問史」の編纂は重要な課題となってくるであろう。但し、この半世紀、一橋大学の規模、所属する研究者の数も拡大・増加し、学問の専門化・細分化・多様化が進んでおり、各研究科・研究所で行われている研究の流れを「一橋の学問」として有機的にまとめていくことは必ずしも簡単ではない。そうした状況のなかで、これまでの一橋大学における「学問史」刊行の歴史を跡付けること、また、そこで議論されていた事柄を明らかしておくことは、創立 150 年を迎える「学問史」編纂の準備作業として無駄ではないと考える。

２．一橋大学における学術誌等の刊行の歩み（創立百周年記念以前を中心として）

一橋大学の歴史には、「実業教育」中心の商業学校・高等商業学校から、アカデミズムを基礎とする大学への昇格を目指し、その実現を果たしていった奮闘の記憶が脈々と流れている。まさに「研究」を勝ち取ってきたのである。何度かの廃校の危機に直面しながらも、「専攻部」の設置、「ベルリン宣言」、「申酉事件」などを経て、東京商科大学の設立に至った苦難の道については、多くの先人が学園史にまとめてきた。「商科大学設立ノ必要」と題された「ベルリン宣言」（1901 年）はヨーロッパに留学していた石川巌、石川文吾、神田乃武、滝本美夫、津村秀松、福田徳三、志田鉀太郎、関一らによって起草されたものであった。すでに佐野善作は 1900 年に帰国していたが、その後、彼らは続々と留学を終え、母校の教壇に立つなかで、一橋におけるアカデミズムを醸成し、大学昇格運動の中心的な役割を果たしていった。

こうした若き研究者のアカデミックな活動が、全体として、どのように一橋の学問

を形成していったのかということを論じることは容易でない。そこで、本稿では、少々論点は異なるが、大学の学術誌、学問史等の刊行の歴史という点から、その一端をとらえてみたい。「表　一橋における学術誌・学問史の刊行」にあるように、1921 年、大学の研究機関誌として、『商学研究』が創刊された。大学への昇格を果たした 1 年後である。これにより、東京商科大学は、教員の研究成果を定期的に公刊する大学としての基盤を確立した。創刊号の執筆陣は、三浦新七、下野直太郎、中村進吾、上田貞次郎、井浦仙太郎、高垣寅次郎、井藤半彌、石川文吾、佐野善作らであった。以後、東京商科大学の教員にとって、この『商学研究』は貴重な研究成果公表の場の一つとなっていった。大学への昇格が実現し、そのアカデミズムの基盤構築のために、まず、学術誌の刊行がなされたことに注目できよう。その後、1932 年には、大学の研究機関誌は、研究年報として、『商学研究』『法学研究』『経済学研究』に再編されていった。これらの研究年報の執筆者、論文の内容から、当時の商科大学の研究動向をうかがうことができよう。なお、研究年報の刊行は、制度的な変遷・拡充を遂げつつ、各研究科の学術誌として現在にいたっている。

研究年報に加え、新制一橋大学の時代になると、経済研究所の『経済研究』（1950 年創刊、季刊）、また、英文ジャーナルである各学部・研究科・エリアの *Hitotsubashi Journal*（1960－1961 年創刊）のシリーズ も刊行された。これら研究誌も一橋大学の研究成果の発信の場として重要な役割を果たしている。すでに一橋大学が 1960 年代初頭から英文誌を刊行していたことは注目に値する。

こうした研究誌の刊行に加え、一橋の学問を考えるうえで、東京商科大学が自らの研究成果を公表する場として、記念論文集をしばしば刊行していたことも忘れてはならない。まず、1925 年には『（創立）五十周年記念論文集』、1936 年には『（創立）六十周年記念論文集』が刊行された。前者には、上田貞次郎を筆頭に 26 名の錚々たる顔ぶれの教員が研究論文を寄稿している。また、後者には、三浦新七、上田貞次郎、根岸佶等をはじめとする 27 名が著者として名を連ねている。この論文集が一橋会の編纂・刊行であったことから、教員だけでなく、そこには学生の論文も含まれていた。学生も研究活動の一翼を担った、当時の商科大学の雰囲気をそこに感じることができよう。『六十周年』の「刊行に際して」にもあるように、論文集は一橋の歴史・学問を強く意識して編纂されたものであり、これら記念論集は当時の「一橋の学問」を論じるうえでの貴重な材料となる。

さらに、新制一橋大学の設立後にも、記念論集の編纂が行われた。1950 年には『一橋大学創立七十五周年　記念論集』が刊行されたが、これは『一橋論叢』の特集号「一橋大学 75 周年記念号」（第 24 巻第 2－5 号）を一冊にまとめたものである。この特集号については、後述する。さらに、1955 年に『一橋大学創立八十周年　記念論集　上

巻』『同　下巻』が刊行された。「第一篇　経済学」「第二編　社会学」「第三編　商学」「第四編　法学」「第五編　文化諸科学」からなる本書には、村松恒一郎、上田辰之助、山口茂、田上穣治、山田勇ら 32 名の教員が寄稿している。その巻頭言「創立八十周年記念論集のために」のなかで、中山伊知郎は「（本書）のなかの一つ一つの論文が、一橋の学問の進歩の歴史を示す指標として評価されるであろう。」①と記している。

上述の研究年報、英文ジャーナル、記念論文集等は基本的に個々の教員の研究発表の場であった。これに対し、「一橋の学問」の総合化を目指した研究月刊誌が、1938 年に創刊された『一橋論叢』であった。その創刊の経緯は、例えば、増田四郎「一橋論叢創刊前後の思いで」（『一橋論叢』第 100 巻 4 号）などに詳しい。白票事件後の重苦しい雰囲気のなかで、上田貞次郎学長のイニシアチブのもと、山口茂、増地庸治郎、中山伊知郎、井藤半彌、猪谷善一を創立委員として刊行された『一橋論叢』は、以後、一橋大学の学問を結集させる「学内一般の論壇」としての役割を果たしていった。例えば、創刊当時、毎号に掲載された「学界展望」は一冊にまとめられ、『文化諸科学学界展望』として第一輯（1939 年）から第四輯（1942 年）まで刊行された。その執筆者は東京商科大学を代表する研究者であり、その内容は当時の関係諸学界全体の状況を論じたものとして、大きな学問的影響力を有していたという。この『一橋論叢』の刊行は戦後の一時期中断したものの、70 年近く存続し、残念ながら、2006 年に廃刊となった。

『一橋論叢』が「一橋の学問」を語るうえで貴重な材料となることは、この月刊誌が、様々な機会をとらえて、「特集号」を組んできたことからも確認できる。その一つとして、著名な教員を記念する特集号の刊行があげられよう。例えば、1941 年 1 月には「故上田学長追悼号」（第 7 巻 1 号）が刊行され、上田貞次郎自身の遺稿、また、上田辰之助、太田哲三、増地庸治郎、山中篤太郎の論考が収められている。また、新制一橋大学の設立直後には、「三浦新七博士記念論文集」（第 22 巻 1 号）が刊行された。寄稿者である村松恒一郎、上田辰之助、中山伊知郎、高橋泰蔵、山田雄三、上原専禄、根岸佶、村松祐次、山口茂などの名前を見るならば、そこに当時の「一橋の学問」の奥深さと広がりを捉えることができよう。その後も、教員の退職・追悼等を記念する形での特集号の刊行は機会あるごとに続けられていった。そこには、当該教員と縁の深かった研究者の論文、本人の年譜・著作目録等が収められていた。また、学問分野ごとの、あるいは、共通テーマを設定した特集号の編纂も盛んであった。そのなかでは、例えば、「人と学説」「学問の現状と動向」といったシリーズの企画も行われていた。近年には、新入生等をも読者として想定した「学問への招待」という特集号も刊行されていた。様々な形をとった特集号の一冊一冊に、一橋の学問を牽引した教員・講座を中心とした研究の世界を確認することができる。

『一橋論叢』が「一橋の学問」を中心課題に据えた特集号を組んでいたことは大いに

注目できる。1950 年には「一橋大学 75 周年記念号」が 4 回に分けられて刊行された（第 24 巻第 2 号、同 3 号、同 4 号、同 5 号）。各号は商学、経済学、法学、社会学の特集号としてまとめられ、上田辰之助、杉本栄一、田中誠二、上原専禄らが各号の巻頭論文を記し、各号最後に教員による座談会の記録が収録されている。「一橋商学の 75 年」「一橋経済学の 75 年」「一橋法学の 75 年」「一橋社会学の 75 年」と題された座談会の記録から、当時の教員が一橋の学問、その歴史をどのように考えていたのか、かれら自身の言葉から捉えることができる。さらに、1955 年には『一橋大学創立八十周年記念号　一橋学問の伝統と反省』が刊行された。学長・中山伊知郎の巻頭言「一橋論叢記念論集に寄せて」に続き、商学、経済学、法学、社会学の 29 名の教員が各研究分野における「一橋学問の伝統と反省」を記している。そこに収められた各論文は文字通り「学問の伝統と反省」を意識して記されたものであり、一橋の学問史を論じるうえで、この特集号が貴重な材料を提供していることは疑いない。各著者が投げかけた問題提起は現在の一橋人にとっても新鮮である。この点についは後述する。

３．一橋大学における学問史の編纂（創立百周年を中心として）

すでに述べたように、「一橋の学問」について、『一橋論叢』は 1950 年と 1955 年にその特集号を刊行した。一橋の学問を意識した論文集等の刊行は以前より行われていたが、「一橋の学問」そのものを全学的に問う企画は、これらの特集号が初めてであったといえよう。新制一橋大学の成立から間もない時期、中山伊知郎学長の「八十周年記念号」巻頭言に示された、「一橋の学問が何であるかの一面は、先ずこの過去を顧みること」、そして、「ここに展開された吟味と反省とが、一橋の学問の新しい時代を示す」②という言葉に、当時の一橋人の意気込みを読み取ることができよう。

その後の学問史の編纂は、一橋大学学園史編集委員会『一橋大学創立百年記念　一橋大学学問史』（1982 年）まで待たねばならなかった。創立百周年を記念して刊行された本書は、「商学」「経済学」「社会・歴史学」「一般教育」の各編からなり、雲嶋良雄、馬場啓之助、勝田有恒、古賀英三郎、山川喜久男をはじめとする 66 分野の 76 名の教員が寄稿していた。まさに全学をあげて本書の編纂に取り組んだことがわかる。なお、1986 年、本書は一部項目（体育学）、各学部・研究所の歴史についての座談会記録等を追加し、『一橋大学学問史』（一橋大学学園史刊行委員会）として増補・刊行された。これらの『学問史』により、1980 年代の一橋大学の学問状況を具に捉えることができる。この時期までに、一橋大学の規模が急速に拡大し、学問の専門化・多様化が進行していたことを、そこに確認することができる。

他方、1985 年、如水会の内部機構であった一橋大学学園史編纂委員会によっても学

問史の刊行が行われた。同委員会『一橋の学風とその系譜　１』『同　２』は、「学問に結実した先生方の人格と背景、生き方と雰囲気、求真力と影響力など、いうならば人間味のある学風とその系譜について、この際残しておくべきものがあるのではないか」③という趣旨からまとめられたものであり、大変興味深い内容となっている。1981 年以来、「一橋大学の学問を考える会」（新井俊三主宰）が毎月開かれていたが、本書は、その講師として迎えられた一橋教員、その関係者の講話の内容を中心にまとめられている。増田四郎、山田雄三、高橋長太郎、木村元一、石川滋、末松玄六、吉永栄助、瀬沼茂樹、高橋泰蔵をはじめとする 33 人の現・元教員等が、一橋の「経済学」「商学」「社会・歴史学」「法学」「文学」「学風」について興味深い議論を展開している。本書は『一橋大学学問史』と対をなしており、当時の一橋大学の学問、学風、教員の姿をとらえるうえで欠くことのできない資料となっている。

４．これまでの学問史編纂から見えてくるもの

すでに述べたように、大学の規模が拡大し、学問の専門化・多様化が進む中で、今後、一橋大学の学問を全体としてとらえていくことは簡単ではない。しかし、この問題は、すでに、新制一橋大学設立の頃から大学の研究者の間では強く意識されていたようである。例えば、前述の『一橋学問の伝統と反省』のなかで、増田四郎は次のように記している。

「一橋大学というものが、四つの学部にわかれて、若い人たちがはじめから学部を異にして勉強するという傾向がつよくなって来ると、専門化の方向のみが進んでも、社会科学の綜合的見地からする問題意識というものが、漸次にうすめられて来る危惧なしとしない。この危険は、現在の段階では高商または商科大学以来のスタッフが多いため、どうにかくいとめられているが、これから各学部別に学んだ新しいスタッフが入って来ると、益々ばらばらとなる危険がある。或る特殊テーマの徹底分析に精進することは大いにのぞましいところであるが、その仕事が一橋大学という伝統ないしは社会科学の全体との関連において、どういう位置をもっているのかを忘れてしまったような特殊研究、すなわち最初から狭い枠にはめられた専門研究の歴史であっては、われわれの特色を活かしてゆくことは出来ない。」④

増田の言葉は「歴史学」について述べたものであるが、現在の一橋の学問全体を考えるうえでも示唆に富んでいる。その後、一橋大学の研究者数は大幅に増加し、その学問分野も多岐にわたっている。さらに、一橋に入学し、そこで学問の世界に触れ、学者と

して育ってきた教員は全体の一部にすぎない。そうした状況のなかで、一橋学問の歴史、その現在を総合的な視点からまとめることは容易でないが、これは大学の将来を見据えるうえで重要な課題である。そのためにも、まずは、これまでの「学問史」が一橋の学問をどのようにとらえていたのかということを明らかにしておくことが必要であろう。

「一橋の学問とは」という問題については、すでに、多くの先人が「学問史」のなかでさまざまに論じてきた。そこに示された理解は、今後の学問史編纂にとって示唆に富む内容となっている。その全体をここで論じることは出来ないが、ここでは、多くの一橋人が次の二点を強調していたことを確認しておきたい。

第一に実学の重視である。例えば、上述の文章のなかで、増田四郎は一橋の歴史学の特徴をまとめている。かれは、本学の歴史が商法講習所にその起源があることを強調し、「実際上の必要から発した先学が、研究の円熟とともに到達した独自の境地が、結果的にみて「歴史学」となった」⑤と述べている。つまり、一橋では、現実を理解する必要性から歴史学が生まれてきたのであり、さらに、その学問は実証的方法、「しろうとくさいやり方」、社会学的考察・比較史的方法に支えられていたとまとめている。現実に根差した学問という点は、「学問史」のなかで、多くの人々が強調しているところであった。現実から離れた「学問」への戒めとして、上田貞次郎の有名な言葉、「学者は実際を知らず、実際家は学問を知らず」という言葉も理解できよう。

第二に、上記の点と関わるが、何もないところから、学問を作り上げてきたということへの自負である。与えられた「学問」ではなく、商業学校というその出自から、必要に迫られての学問の創造であった。同じく、『一橋学問の伝統と反省』のなかで、東洋経済事情を専門としていた村松祐次は次のように述べている。

「何よりも根岸博士のような雄大なテーマを、現実のなかから素直に読み取り、しかもこれを長年月の労苦によって学問的業績に客観化する努力をしているか、と言うことである。根岸先生の作られた伝統を固定化せず、と言うよりもそれはそれとして、何も伝統や遺産のない所で、根岸先生がそれを作られた気魄や精励を引きつぐことが出来るか、と言うことである。そして、考えてみると同じような反省は、一橋の学問全体にも、あてはまりそうである。」⑥

ここにある「伝統を固定化せず」という点に関連して、増淵龍夫・渡邊金一も次のように記している。

「学風は若い人々の精神的形成の上で決定的な契機となる。がしかし同時にそれは彼等にとって、後年そこから抜け出んとして果し得ざる桎梏とも化する。およそ偉大な伝

統というが如きものはいずれもかかる本質を具有するものであろう。・・・（一橋の、いや日本全体の歴史研究者に課せられた）開かれた課題に答えることこそ、私たちが伝統をうけつぎ、伝統を新しい現実の基盤の上につくり上げていく途なのであろう」⑦

村松祐次・増渕龍夫・渡邊金一らの指摘する「創造的な学問」への姿勢が、一橋大学の学問全体を貫いて存在してきたとするならば、その伝統が、現代において、どのように継承されているのか、その問題を検討することは、創立 150 年を記念する学問史のなかでの重要なテーマとなるであろう。

５．まとめ

本稿は、一橋大学における学術誌、学問史の刊行の歴史を概観し、そこから読み取れる点を少々述べたものである。今後、創立 150 周年の準備が進むなかで、大学による本格的な学問史の編纂に着手されるであろうが、最後に、創立百周年記念の『学問史』の「巻頭言」において、当時の宮澤健一学長が記した言葉の一部を引用したい。

「学問史という形で過去と伝統を顧みることの意義は、それをこうした将来への展望に、現在というわれわれの時点で、つないでみせることである。形成か、模索か、胎動か、その差はあるにせよ、ここに展開される一橋学問の点検と吟味によって、明日への方向性が示されていることを期待したい。」⑧

宮澤学長の残した言葉は、創立 150 年を記念する「学問史」の編纂へのメッセージとも言えよう。

① 中山伊知郎「創立八十周年記念論集のために」一橋大学一橋学会編『一橋大学創立八十周年記念論集　上巻』（勁草書房、昭和 30 年 9 月）2 頁。
② 中山伊知郎「一橋論叢記念論集に寄せて」『一橋大学創立八十周年記念　一橋学問の伝統と反省』（一橋大学一橋学会）昭和 30 年 10 月、2 頁。
③ 小島慶三「はしがき」一橋大学学園史編纂委員会『一橋の学風とその系譜　1』昭和 60 年 7 月。
④ 増田四郎「歴史学」前掲『一橋大学創立八十周年記念　一橋学問の伝統と反省』311－312 頁。
⑤ 前掲、307 頁。
⑥ 村松祐次「東洋経済事情」、前掲『一橋大学創立八十周年記念　一橋学問の伝統と反

省』136 頁。

⑦ 増淵龍夫・渡邊金一「経済史」前掲『一橋大学創立八十周年記念　一橋学問の伝統と反省』137、150 頁。

⑧ 宮澤健一「一橋大学学問史に寄せて」『一橋大学創立百周年記念　一橋大学学問史』（一橋大学学園史編集委員会、昭和 57 年 12 月）

表　一橋における学術誌・学問史の刊行
（創立百周年記念まで）

1875（明治 8）年 9 月	「商法講習所」が開業する
1884（明治 17）年 3 月	「東京商業学校」と改称する
1887（明治 20）年 10 月	「高等商業学校」と改称する
1897（明治 30）年 9 月	専攻部を設ける
1901（明治 34）年 2 月	「ベルリン宣言」が発せられる
1902（明治 35）年 4 月	「東京高等商業学校」と改称する
1916（大正 5）年 2 月	『創立四十周年記念講演及同祝典記事』（東京高等商業学校）
1920（大正 9）年 4 月	「東京商科大学」となる
1921（大正 10）年 5 月	研究発表機関誌『商学研究』を創刊する
1925（大正 14）年 12 月	『東京商科大学創立五十周年記念論文集』（東京商科大学）
1926（大正 15）年 2 月	『東京商科大学創立五十周年記念講演集』（東京商科大学）
1932（昭和 7）年 2 月	研究年報『商学研究』を創刊する。この年、『法学研究』（４月）、『経済学研究』（５月）も創刊される。
1936（昭和 11）年 12 月	『東京商科大学六十周年記念論文集』（東京商科大学一橋会）
1938（昭和 13）年 1 月	『一橋論叢』を創刊する。（2006 年に廃刊となる）
1944（昭和 19）年 9 月	「東京産業大学」と改称する
1947（昭和 22）年 3 月	「東京商科大学」の旧名に戻る
1949（昭和 24）年 5 月	「東京商科大学」を改組し「一橋大学」を設立する
1950（昭和 25）年 1 月	経済研究所『経済研究』が創刊される
1950（昭和 25）年 10 月	『一橋大学創立七十五周年　記念論集』（一橋大学東京商科大学一橋学会）
1955（昭和 30）年 9 月	『一橋大学創立八十周年　記念論集　上巻』『同　下巻』（一橋大学一橋学会）
1955（昭和 30）年 10 月	『一橋大学創立八十周年記念　一橋学問の伝統と反省』（一橋学会編『一橋論叢』第三十四巻第四号）
1956（昭和 31）年 10 月	研究年報『社会学研究』が創刊される。
1959（昭和 34）年 3 月	研究年報『人文科学・自然科学研究』が創刊される
1960/61（昭和 35/36）年	各学部・エリアの英文雑誌　*Hitotsubashi Journal*　創刊
1982（昭和 57）年 12 月	『一橋大学創立百年記念　一橋大学学問史』（一橋大学学園史編集委員会）
1985（昭和 60）年 7 月	『一橋の学風とその系譜　１』（一橋大学学園史編纂委員会）
10 月	『一橋の学風とその系譜　２』（一橋大学学園史編纂委員会）
1986（昭和 61）年 3 月	『一橋大学学問史』（一橋大学学園史刊行委員会）

一橋大学の学園史刊行の歴史

大場 高志
（一橋大学学園史資料室）

１．はじめに

一橋大学は明治 8 年の商法講習所開所以来、今年で 140 年目を数えるが、その間多くの学園史関係の図書を刊行してきた。学園史資料室には、法人化前まで学内に設置されていた「一橋大学学園史刊行委員会」や如水会に設置されていた「学園史編纂事業委員会」の事務綴が所蔵されている。これらを参考に、現在までの学園史関係図書の刊行状況とその刊行にいたる企画状況について、時代区分ごとに表にまとめた。なお、本学関係の事務綴については、欠落している年代のものもあり、企画状況については正確さを欠いているところもあるが、今後の調査等により、修正をしていきたい。

なお学園史間関係図書には他にも、如水会会員の大澤俊夫氏が記した『東京商科大学予科の精神と風土』など多数の学園史に関係する図書が刊行されているが、本稿では、大学本体の一橋大学学園史刊行委員会が企画したものと如水会の学園史編纂事業委員会が企画したものに限って述べる。

２．学園史刊行企画の時代区分

学園史関係図書の刊行企画については、大きく以下の 6 つの年代に区分される。

初期：大正 5 年（1916 年）～昭和 36 年（1961 年）

年月	西暦	事項
大正5年2月	1916	『創立四十周年記念講演及同祝典記事』東京高等商業学校発行
大正5年9月		『東京高等商業學校創立四十年紀念帖』 東京高等商業学校発行
大正14年9月	1925	『一橋五十年史』東京商科大学一橋会発行
大正14年11月		『東京商科大学創立五十周年記念論文集』東京商科大学商学研究編輯所発行
大正15年2月	1926	『東京商科大学創立五十周年記念講演集』東京商科大学発行
昭和11年12月	1936	『東京商科大学六十周年記念論文集』東京商科大学一橋会発行
昭和25年10月	1950	『一橋大学創立七十五周年記念論集』一橋大学東京商科大学一橋学会編、日本評論社発行
昭和26年2月	1951	『Hitotsubashi in Pictures：風雪七十五年』一橋創立七十五周年記念アルバム委員会発行
昭和26年12月		『一橋専門部・教員養成所史』一橋専門部教員養成所史編纂委員会発行
昭和30年9月	1955	『一橋大学創立八十周年記念論集』上-下　一橋大学一橋学会発行
昭和30年10月		『創立八十周年記念一橋大学記念館並図書館出品展示会目録』一橋大学附属図書館発行
昭和35年10月	1960	『一橋大学歴史資料展示目録：創立八十五周年記念』一橋大学附属図書館発行
昭和36年5月		『現代への発言：一橋大学創立八十五周年記念講演集』一橋大学一橋学会編、春秋社発行

大正 5 年（1916 年）の『創立四十周年記念講演及同祝典記事』が最初のまとまった周年記念図書の刊行である。以後、五十周年、六十周年、七十五周年、八十周年、八十

五周年と記念論集が刊行される。商法講習所からの通史的記述としては、東京商科大学一橋会が刊行した『一橋五十年史』と専門部と教員養成所の「発展的解消」に際して一橋専門部教員養成所史編纂委員会が刊行した『一橋専門部・教員養成所史』がある。また、七十五周年には学生主体の一橋創立七十五周年記念アルバム委員会が『Hitotsubashi in Pictures：風雪七十五年』という記念アルバムを刊行していることが注目される。

第 I 期：昭和 37 年（1962 年）～昭和 50 年（1975 年）

昭和37年4月	1962	高橋泰蔵学長、大学百年史の刊行を期して「一橋学園歴史資料整備委員会」(委員長村松祐次)を設置（学園紛争で中断）
昭和41年4月	1966	「一橋学園史資料調査室」を設置、後援会職員として川﨑操を採用(昭和51年まで)
昭和48年4月	1973	創立百年記念事業企画委員会(都留重人学長以下7名)設置
昭和50年10月	1975	小泉明学長のもと、創立百年記念諸事業実施 ＜記念刊行＞ 1.『一橋大学附属図書館史』 2.『一橋大学年譜I』 3.『一橋大学創立100年記念・学園史資料及び貴重図書・展示目録』 4. Catalogue of old and rare foreign books mainly from the general collections (貴重図書室所蔵洋書目録)

昭和 37 年（1962 年）4 月に高橋泰蔵学長は、大学百年史の刊行を期して「一橋学園歴史資料整備委員会」を設置した。その後の学園紛争によって作業は中断するが、本学で学園史刊行のための学内委員会を継続的に設置した嚆矢であると思われる。なお、この時期までの事務綴は所蔵しておらず、「一橋学園歴史資料整備委員会」がどのようなことを行ったかはよく分からないが、昭和 41 年 4 月には、「一橋学園史資料調査室」が設置され附属図書館事務長であった川﨑操が後援会職員として採用されている。現在の学園史資料室には川﨑操が収集調査したと思われる資料が多数残されている。実際の創立百周年に際しては、川﨑操が編纂した『一橋大学附属図書館史』と『一橋大学年譜』が刊行された。

なお、昭和 50 年（1975 年）10 月に『一橋大学百年史』、昭和 56 年（1981 年）5 月に『写真集一橋大学百年』という図書が財界評論新社・教育調査会から刊行されている。しかし、これらの図書に一橋大学は資料提供等の協力はしているが、編集企画には参画していない。財界評論新社は学校史専門の出版社であり、多くの学校の周年記念年史を刊行している。一橋大学ないしは如水会が年史の編集を発注したのかもしれないが、その記録はいまのところ確認できていない。

第Ⅱ期：昭和 51 年（1976 年）～昭和 58 年(1983 年)（赤字・斜字は如水会側の動き）

昭和51年6月	1976	*大学と如水会とで創立百年記念事業募金会発起人会(会長中山伊知郎　以下「募金会」という。)が設立され、認可。免税措置が国税庁から許可。ただし、「百年史刊行費」は承認を得られず、「百年史刊行費援助」として承認される。*
昭和51年11月		大学に「学園史編集委員会」(委員長木村増三)が設置され、ア. 学制史、イ. 学問史、ウ. 雑録(座談会等)の発行を任務とした。
昭和52年4月	1977	*募金会、募金活動を開始*
昭和52年12月		「学制史専門委員会」(委員長中村政則)を設置
昭和53年5月	1978	「学園史資料室」(室長中村政則)に助手1名(大島栄子　昭和58年3月まで)を採用
昭和54年12月	1979	*募金会、募金活動を終了*
昭和54年4月～56年3月		各学部、研究所の座談会を開催し、順次『座談会記録』発行
昭和55年11月	1980	*如水会理事会で「学園史編纂準備委員会」(委員長依光良馨)を設置*
昭和56年4月	1981	学園史編集事業の拡充と期間の延長が決定。1.2年間の延長(昭和58年3月末まで)2.予算増額 *如水会に「一橋学園史編纂事業委員会」(委員長茂木啓三郎)を設置、2年間の予定で事業開始* *如水会内に「学園史編纂室」(室長依光良馨)を設置し、専従員3名を採用*
昭和56年6月		*「一橋学園史編纂事業委員会常任委員会」(委員長長谷川徳次)の第1回を開催*
昭和56年7月		評議会で「学制史本文編」の編集を見送り「一橋大学学制史資料集」の刊行に代えることを決定
昭和56年8月		*『一橋新聞復刻版大正13年～昭和17年』(5分冊)を作成*
昭和56年10月		*第7回常任委員会で10の作業部会を編成(1申酉事件、2籠城事件、3白票事件、4如水会史、5運動部・文化部、6戦後、7一橋会、8予科・一橋寮、9ゼミナール、10専門部教員養成所)*
昭和56年11月		*第9回常任委員会で「籠城事件史専門委員会」「如水会史専門委員会」を発足*
昭和57年3-11月		『学制史資料集』第1集～第3集を発行
昭和57年3月	1982	*『一橋新聞復刻版昭和21年～昭和35年』(2分冊)を作成*
昭和57年5月		*「太平洋戦争と一橋」作業部会を増設*
昭和57年6月		*1. 募金会の残余財産は昭和58年3月末を目途に委任経理金(一橋大学創立百年記念学術奨励金)として大学に寄付する。2. その使用目的は主として国際交流のための資金とする、ことが募金運営委員会と大学側とで合意*
昭和57年9月		学部長会議で1. 百年史編集事業は昭和58年3月末をもって完了し、委員会は解散する、2. 国際交流を主たる業務とする委任経理金の受入と活用計画の具体化を進める、ことを確認
昭和57年9月		*「一橋大学学園史編纂事業委員会」が『一橋籠城事件』及び『如水会の歩み』を発行*
昭和57年12月		「一橋大学学園史編集委員会」が『一橋大学創立百年記念一橋大学学問史』を発行
昭和58年1-8月		『学制史資料集』第4集～第8集を発行し、戦前期までが完了
昭和58年2月		*『一橋新聞復刻版昭和36年～昭和56年』(2分冊)を作成*
昭和58年3月		*「森有礼、富田鉄之助のレリーフ」を作成*
昭和58年3月	1983	「学園史編集委員会」(委員長喜多了祐)が宮沢健一学長に以下の申し送り事項を提出して解散。 1.学問史正式刊行時の留意点、2. 学制史戦後編の編纂と通史の検討、3. 学園史資料室の運営(助手アルバイト採用と如水会側から寄贈される学園史関係資料の取扱)
昭和58年3-6月		*第36回常任委員会で学園史編纂事業委員会は解散するが、6月末まで、残務処理を行う。* *3月31日 『白票事件関係資料覚え書き』(木村増三)* *6月30日 『申酉事件史』(小島慶三)* *6月30日 『一橋のゼミナール』(石川涓吉)* *6月30日 『第二次大戦と一橋』(石川善次郎)* *6月30日 『一橋専門部教員養成所史への回想』(青葉翰於)* *6月30日 『戦後と一橋』(山崎富治、横山武雄)* *6月30日 『商法講習所時代』(渋沢輝二郎)* *6月30日 『大正デモクラシーの開花期のころの学園』(松本秀夫)* *募金会の援助によって刊行された部史* *『一橋大学柔道部八十年史』、『一橋ボートの百年のあゆみ』、『一橋剣道部八十年史』、『一橋大学国際部史』、『一橋のテニス』、『一橋大学卓球部五十年史』、『一橋水泳六十年史』、「東京商科大学カメラアートクラブ作品集」、「一橋大学バスケット部部史資料」*

昭和 51 年（1976 年）11 月、大学に「学園史編集委員会」が設置され、創立百年記念事業の一環として「学園史」刊行のための本格的作業が開始された。「学園史編集委員会」は各部の座談会を開催するとともに、学制史、学問史の専門委員会を設け、『一橋大学学制史資料集』や『一橋大学学問史』を継続的に刊行した。

また、並行して如水会においても、大学との緊密な連携のもと「学園史編纂準備委員会」引き続き「一橋学園史編纂事業委員会」が設置され、主に学生の視点に立った各種の学園史関係図書を刊行した。さらに、学生サークルも創立百年記念事業募金の助成を

受けそれぞれ部史を刊行した。

これらの図書群は、創立百周年にふさわしい学園史関係図書の一大成果群となったが、戦後学制史と大学通史の刊行が課題として残された。

第Ⅲ期：昭和 58 年（1983 年）～平成 3 年（1991 年）

昭和58年3月	1983	「学園史刊行助成金運営内規」を制定、「学園史刊行委員会」(委員長喜多了祐)を設置。 事業内容はア)学問史の仮印刷分の検討と刊行、イ)学制史資料の仮印刷分8冊の検討と合本刊行、学制史資料戦後篇の継続編集、ウ)通史の編集刊行の検討、エ)関係資料の収集、整理 委員会には学問史部会(部会長荒憲治郎)、学制史部会(部会長森田哲弥)を置く。 委員会に学園史資料室(主任中村政則)を置く。
昭和58年7月		「一橋大学学園史関係者の集い」が開催され、森有礼、富田鉄之助のレリーフ及び如水会が収集した学園史関係資料の一覧目録が大学側に寄贈された。また英文大学史の要望があった。
昭和58年8月		*如水会としての「学園史編纂委員会」(委員長増田四郎)が発足、これまでの事業を引き継ぐ*
昭和59年5月	1984	本学「学園史刊行委員会」と如水会「学園史編纂委員会」との懇談会が開催され通史刊行について意見交換が行われた。
昭和59年6月		*如水会「学園史編纂委員会」から「通史の刊行は大学で作るべきである」との要望が出された。*
昭和59年6月		*如水会「学園史編纂委員会」が『花開く東京商科大学予科と寮』を発行*
昭和59年8月		*如水会「学園史編纂委員会」が『一橋大学の未来像』を発行*
昭和59年12月		「学園史刊行委員会」の委員長に荒憲治郎を選出
昭和60年3月	1985	本学「学園史刊行委員会」において、如水側の協力を得て、通史を正式に刊行することが決定
昭和60年3月		*如水会「学園史編纂委員会」が『一橋のゼミナール戦後編上-下』を発行*
昭和60年4月		評議会において、「学園史刊行委員会」の通史刊行の決定が承認された。
昭和60年5月		本学「学園史刊行委員会」と如水会「学園史編纂委員会」との懇談会が開催され通史刊行について評議会決定を伝えるとともに協力を要請した。
昭和60年7月		「学園史刊行助成金運営内規」を一部改正、通史の正式刊行と通史部会(部会長米川伸一)の増設
昭和60年7月		本学「学園史刊行委員会」と如水会「学園史編纂委員会」との懇談会が開催され、*如水会側の通史担当者が報告された。(M18－M17:細谷新治、M17－T9:小島慶三、T9－S6:依光良馨、S6－S15:木村増三、S15－S20:丸山泰男)*
昭和60年7-10月		*如水会「学園史編纂委員会」が『一橋の学風とその系譜:1-2』を発行*
昭和61年1月	1986	学部長会議で「一橋大学創立百年記念学術奨励金及び学園史刊行助成金の使用について」を了承 学園史刊行予算は一橋大学創立百年記念学術奨励金及び学園史刊行助成金の運用果実をもってあてるという内容
昭和61年2月		『学制史資料集戦後編』第9集(昭和20-28年)を刊行
昭和61年3月		『一橋大学学問史』を補正、座談会を含めて正式刊行
昭和61年6月		*如水会「学園史編纂委員会」が『一橋会資料集』を発行*
昭和62年8月	1987	*小島慶三著(一橋大学百年通史稿本)『日本の近代化と一橋』を送付*
昭和62年11月		『学制史資料集戦後編』第10集その1(昭和28-25年)を刊行
昭和62年12月		*木村増三著(一橋大学百年通史稿本)『昭和7～11年の東京商科大学』を送付*
昭和63年12月	1988	『学制史資料集戦後編』第11集その2(昭和28-25年)を刊行
平成元年3月	1989	*依光良馨著(一橋大学百年通史稿本)『大学昇格と籠城事件』を送付* *丸山泰男著(一橋大学百年通史稿本)『戦争の時代と一橋』を送付*
平成2年11月	1990	『学制史資料集』第12集補遺を刊行
平成2年12月～平成3年3月		*細谷新治著(一橋大学百年通史稿本)『商業教育の曙:上-下』を送付*
平成3年6月	1991	『学制史資料集』第12集補遺別冊を刊行。
平成3年7月		学問史部会、学制史部会の作業が完了。今後は通史編纂に向けて通史部会(部会長中村政則)で協議する。執筆者は通史部会長のもとにワーキング・グループを設け、構成員は学長が委嘱

昭和 58 年（1983 年）3 月大学は「学園史刊行助成金運営内規」を制定し、「一橋大学学園史刊行委員会」が設置された。この委員会のもとに学園史資料室が置かれることとなった。課題であった戦後学制史の作成については精力的に作業を進め、刊行していった。

大学通史については、大学が刊行するという意思決定を行い、昭和 60 年（1985 年）には「一橋大学学園史刊行委員会」に「通史部会」を増設し、如水会に協力を求めた。

如水会では「一橋学園史編纂事業委員会」を引き継いだ「学園史編纂委員会」を設置

し、大学とともに大学通史の刊行に向けた検討が行われ、「一橋大学百年通史稿本」を作成した。

第Ⅳ期：平成 5 年（1993 年）～平成 16 年（2004 年）

平成5年3月	1993	大学側、如水会の合同で学園史刊行委員会(委員長中村政則)会合があり、学園史資料室の松村美子(昭和59年から平成16年6月まで学園史資料室員)作成の年表(戦後編)の進捗状況、通史刊行の意見交換があった。
平成6年3月	1994	阿部謹也学長から依頼があり、学園史刊行委員会で「一橋大学120年史」(英文・小冊子)の構成案(3期別)を審議
平成7年9月	1995	『一橋大学百二十年史』を刊行
平成7年10月		創立120周年記念式典を開催
平成10年10月	1998	学園史刊行委員会WGで、『一橋大学125年史』(英語版)を審議、西沢保委員の尽力でマクミラン社と契約が進んでいる。
平成11年2月	1999	学園史刊行委員会及びWG合同委員会で、中村政則教授の退官に伴い、池間誠教授を委員長に選出。 一橋大学125年史(英語版)と一橋大学年譜Ⅱ刊行後も学園史資料室を存続させることを決定。 松村美子氏の後任には週2日ぐらいの人を探すことになった。
平成12年	2000	“Hitotsubashi University 1875-2000”をマクミラン社から刊行
平成12年10月		創立125周年記念式典を開催
平成16年3月	2004	『一橋大学年譜Ⅱ』を刊行
平成16年3月		平成16年度から学園史資料室事務を総務課から附属図書館に移管することを学部長会議に報告

平成 3 年には「一橋大学学園史刊行委員会」の「学問史部会」、「学制史部会」の作業が完了し、「通史部会」の作業が残されていた。また、通史の準備とともに、英文通史の企画が並行して行われた。

創立 120 周年を記念して通史『一橋大学百二十年史』が刊行されると、英文通史の作業が精力的に行われ、創立 125 周年に際しては“Hitotsubashi University 1875-2000”がマクミラン社から刊行された。

学園史資料室が所蔵する事務綴は平成 11 年までしかないが、当時の池間誠一橋大学学園史刊行委員会委員長によると、英文通史刊行後の学園史刊行委員会は、学園史資料室員の松村美子が中心となって整理していた『一橋大学年譜Ⅱ』の推敲、チェックを、当時の細谷新治名誉教授が精力的に行い、最終段階では山内進教授、西沢保教授、池間誠教授も校正作業に加わって、国立大学法人化直前の平成 16 年 3 月に刊行され、一橋大学学園史刊行委員会はその役割を終了した。

現在

平成16年4月	2004	一橋大学法人化。「学園史刊行助成金運営内規」は継承せず廃止。
平成16年5月		学園史資料室を磯野研究室4階から附属図書館時計台棟2階に移転
平成16年以降		学園史資料室長：池間誠（平成16年4月～平成16年11月）、斉藤修（平成16年12月～平成20年11月）、渡辺雅男（平成20年12月～平成22年11月）、江夏由樹（平成22年12月～平成23年3月） 学園史資料室の室員：布施芙佐子(平成16年6月～平成19年5月)、江良邦子(平成19年6月～平成23年3月)、大場高志(平成23年4月～)
平成26年4月	2014	附属図書館長が一橋大学150年史準備室室長に江夏由樹経済学研究科特任教授を任命 小平研究保存図書館を設置

平成 16 年（2004 年）の国立大学法人化に際しては、「学園史刊行助成金運営内規」は継承されることなく、「一橋大学学園史刊行委員会」は解散した。学園史資料室は当

分の間、附属図書館長を室長とし、「125 周年委任経理金」による雇用として週 2 日の室員を置き、創立 150 年までの学園史関係資料の収集を継続することとなった。　平成 23 年（2011 年）には「125 周年委任経理金」も廃止となり、学園史資料室の室員は総務部評価・広報室の契約職員となり、学園史資料室の資料収集を継続して、現在に至っている。

平成 26 年（2014 年）4 月には附属図書館が小平保存研究図書館を設置し、附属図書館長が一橋大学創立 150 年史準備室長を任命した。学園史資料室の資料も小平保存研究図書館に一部を別置し、将来への保存継承に利用している。

３．おわりに

平成 23 年（2011 年）4 月に公文書管理法が施行され、日本においても公文書管理体制が整備されるとともに、国立大学法人では 7 大学の大学文書館が「国立公文書館等」の指定を受けている。一橋大学学園史資料室も創立 150 年史編纂のための学園史関係資料の収集が第一義ではあるが、目指すべき目標は「大学文書館」であるだろう。そのための道はなお遼遠としているが、保存・継承が必要な資料は、なお埋もれているだろうし、日々生産されている。学内のより一層のご理解とご協力を重ねてお願いしたい。

以上

平成 26 年度学園史資料室の業務概要と課題

一橋大学学園史資料室　大場 高志

Ⅰ．業務概要

1．平成 26 年度の 2 月 20 日現在までの学園史資料室の資料収集および資料整理の現状

（1） 大学刊行物や学園史関係資料の収集

平成 25 年度中の収集資料類。なお件数はエクセルデータの行数である。

A：総記関係	19　件	0：非現用資料関係	9　件
B：一橋大学関係	380　件		
C:関係団体個人関係	66　件		
D：一般図書関係	71　件	合計	545　件

（2） 学園史資料室所蔵資料の整理（項目リスト化）

学園史資料室が所蔵している資料は、そのすべてをエクセルにリスト化する作業を行っている。平成 27 年 2 月 20 日現在のリスト件数（行数）は以下のとおり。

A：総記関係	2,160　件	0：非現用資料関係	1,244　件
B：一橋大学関係	5,666　件	川﨑操文庫	231　件
C:関係団体個人関係	2,482　件	神田乃武文庫	1,150　件
D：一般図書関係	1,580　件	合計	14,513　件

この件数の内には附属図書館所蔵のものも含まれている。これらのリストは、一橋大学ＨＷＰの「文書管理」システムにファイルとしてアップし、大学内教職員に限定公開している。

2．平成 26 年度の平成 27 年 2 月 20 日までのその他の業務

(1)　学園史関係の調査依頼

2014年4月17日	丸山泰男略歴調査
2014年4月17日	航空写真の年代調査
2014年4月21日	東京商大事件調査
2014年4月25日	石川滋名誉教授を偲ぶ会（関連資料調査）
2014年4月25日	森有礼肖像写真電子化
2014年5月12日	卒論の起源
2014年5月14日	「如水」の典拠
2014年5月14日	杉山三郊関係調査
2014年6月4日	松本竣介の絵調査（新聞部部室の場所）
2014年6月11日	日本文化講義調査
2014年6月12日	茂木威一略歴調査
2014年6月19日	一橋大学の表札看板調査
2014年6月30日	藤原彰略歴調査
2014年7月2日	明治の外国人教師一覧調査
2014年7月9日	四日会記念碑調査

2014年7月10日	札差青地家調査(『札差事略』貸出)
2014年7月24日	大平正芳関係資料
2014年8月1日	黒田清輝作矢野二郎肖像画調査
2014年8月25日～ 2014年11月16日	如水会創立100周年記念DVD作成支援
2014年9月8日	磯野長蔵関係資料調査
2014年9月29日	海外派遣留学の歴史調査
2014年10月2日	官立大学の地方移譲関係調査(GHQ事件)
2014年10月8日	一橋の学問を考える会調査
2014年10月15日	神田乃武文庫閲覧
2014年10月17日	教職課程の講義要綱(平成元年から)閲覧
2014年11月19日～	学徒出陣関係資料調査(展示企画)
2014年11月26日	専攻部卒業生の名簿調査
2014年12月5日	一橋講堂キャプション(学術総合センタービルの建設主体)
2014年12月25日	清水善三の卒業日(明治45年7月)
2015年1月8日	生協関係資料
2015年1月8日	戦後(昭和20～25年)の授業カリキュラム表
2015年1月20日	昭和7-9年思想事件関係書類閲覧
2015年2月9日	高橋泰蔵封の封筒を現学長により開封
2015年2月13日	The Internatioanal Society for Business Educationと一橋
2015年2月20日	上田貞次郎宛書簡コレクション(国際連盟協会)閲覧

(2) 購入図書受入

日付	タイトル	数量	購入先
6月11日	第6回卒業記念(写真帳)	1冊	泰成堂
6月11日	東京商科大学一橋震災後写真絵葉書	12枚	書肆泰川堂
6月11日	星野大路の影とかたちと／内藤初穂	1冊	苔花堂書店
6月16日	暁翔(予科卒業記念号)1942年	1冊	藤井書店
6月18日	東京商科大学入学要覧昭和11年版	1冊	泰成堂
6月19日	ああ五十年／二二予一会	1冊	秦川堂
6月23日	暁翔(創刊号)1940年	1冊	藤井書店
9月17日	八幡商業五十五年史	1冊	文生書院
10月27日	東京商科大学卒業五十周年記念誌	1冊	アテネ堂
10月27日	六三制教育の礎	1冊	博誠堂
10月27日	東京商科大学工業講座要綱	1枚	魚山堂
10月27日	「一橋の鐘」1-6号	6冊	あきつ書店
11月5日	大学改革1945-1999	1冊	デラシネ書房
11月5日	ローンテニスの友	1冊	かわほり堂
11月5日	郁水五十年	1冊	古書Duckbill
11月5日	ヘルメス第三号	1冊	WABI BOOK
11月10日	鈴木永二さんを偲ぶ	1冊	金井書店
11月10日	写真集如水会館	1冊	港や書店
11月10日	社団法人如水会会館之面影	4枚	泰川堂書店
11月10日	神秘アマゾンへの挑戦	1冊	アンデス書房
11月10日	岩田先生を偲んで	1冊	泰成堂書店
11月12日	高商二八同級会四十季記念録	1冊	水明堂
11月12日	九月会卒業四十五周年記念誌	1冊	水たま書店
11月12日	一橋バレー五十年史	1冊	水たま書店

11月12日	東商戦の三十年	1冊	藤井書店
11月12日	長煙遠く棚引きて	1冊	平読書クラブ
11月12日	初代片倉兼太郎君事歴	1冊	金沢書店
11月12日	阿都萬路	1冊	なぎさ書房
11月12日	十四日会誌　第6号	1冊	かぼちゃ堂
11月12日	一路会誌:1956年1号-1958年2号	2冊	太郎舎
11月12日	第六回東京大学・一橋対校競漕大会	1冊	岡本書店
11月12日	サイエンスミニマム10講	1冊	往来社
12月15日	クレタの壺	1冊	永楽屋

(3)　寄贈資料受入

日付	寄贈者	タイトル
2014年4月24日	塩野谷祐一	杉村広蔵自筆「白票事件前後」
2014年6月16日	栗原行廣	栗原登一、正男マッチラベルコレクション
2014年6月26日	野村由美	一橋大学体育会報:第1号
2014年9月26日	唐津宏子	東京商科大学関係資料(ベルト、メダル等4点)
2014年10月8日	渡辺俊子	故渡辺真一郎様アルバム
2014年11月12日	石和田四郎	東京商科大学学帽
2015年2月5日	馬場美津子	東京商科大学卒業アルバム昭和15年、一橋歌集
2015年2月12日	駒林矩子	東京高等商業学校卒業記念写真帖明治43年

(4)　記事索引作成

誌名	巻号年月
如水会会報	No.401(1963.9)～No.500(1971.12)
merc	創刊号(2007.3)～3号(2008.3)
HQ	創刊号(2003.8)～Vol.45(2015.1)
鐘:一橋大学附属図書館報	No.1(1979.7)～No.50(2006.9)
センターニュース/一橋大学情報処理センター	No.1(1982.3)～No.65(2003.2)
Campus Life/一橋大学学生部	創刊号(1999.7)～第6号(2001.冬)
学生相談室いまここだより	第1号(2005.12)～第11号(2013.10)
就職情報室だより	第1号(2004..4)
キャリア支援室だより	平成20年度第1号(2008.5)～平成23年度第1号(2011.4)
キャリア支援ニュース	[平成24年度]第1号(2011.5)～[平成25年度]第6号(2014.2)
Agora/一橋大学大学教育研究開発センター	創刊号(2001.3.)～No.22(2011.11)
男女共同参画推進室Newsletter	No.1(2014.10)～No.2(2014.12)
Newsletter/学生国際交流委員会	[Vol.]1(1988.5)～Vol.26(1994.12)
Bridges/学生国際交流委員会;留学生センター	Vol.1(1995.4)～Vol.24(2009.3)
就職活動体験記/就職情報室;キャリア支援室	[1](1998.3)～[18](2014.11)
就職活動体験記/キャリア支援室大学院部門	[1](2012.3)～[4](2014.10)
インターンシップ報告書/キャリア支援室	[1](2005.12)～[9](2013.12)

(5)　他大学等への出張調査

2014年6月20日～21日	戦時中の附属図書館蔵書疎開地見学出張	辰野町(武井覚太郎旧邸跡) 伊那市創造館

(6)　本学来学者への学内案内

2014年7月29日	武蔵野美術大学(黒川教授)	学内彫像調査
2014年8月20日	国立市民まち・環境WS	兼松講堂ガイド(くにたちカルタ)
2014年9月8日	川﨑清子(磯野長蔵関係者)	磯野研究館見学

2014年9月19日	NHKアート(村尾)	如水会DVD映像撮影
2014年11月13日	中国中央テレビ	日本のイノベーション取材
2014年11月21日	「中央線が好き」編集部	兼松講堂下見、見学

(7) 休日、祝日等に学内ロケがある場合、立会等に対応。今年度の件数は８件である。

(8) 「一橋大学年譜」の平成年間版のため、一橋大学関係の出来事リスト作成。

(9) 後援会「大学史編纂基金」の助成による『統制経済』20 冊の修復作業。

(10) 一橋大学創立 150 年史準備室の「ニューズレター」創刊号の作成に協力し、「学園史刊行の歴史」と「平成 26 年度学園史資料室の業務概要と課題」の記事を投稿。

(11) 『一橋大学附属図書館研究開発室年報』第 3 号に「上田貞次郎宛書簡コレクションについて」の報告記事を投稿。

Ⅱ．学園史資料室の今後の課題

1． 法人文書管理支援

「公文書等の管理に関する法律」施行により、平成 24 年度から「一橋大学法人文書管理規則」が定められた。一橋大学の法人文書管理支援とともに、「国立公文書館等」への「大学文書館」としての指定をどのように目指すかが課題である。

2． 歴史資料等保有施設としての運営体制

学園史資料室は「歴史資料等保有施設」としての内閣総理大臣指定を受けていない。当該施設への指定を目指すとともに、当該指定施設相当の運用体制を整えていく必要がある。

3． 歴史資料等保有施設としての利用体制

学園史資料室所蔵資料は、将来の年史作成のための資料であることが第一義であるが、現在でも大学の教育研究用の学術資料として十分有用なものである。これら資料の有効な利用のためには、適切な利用運用が必要である。当分の間は、一橋大学附属図書館の利用規程に準じることとし、特に文書類については「大塚金之助関係資料取扱要領」に準じる運用を行うこととしている。

4． 一橋大学創立 150 年史準備室との連携

平成 26 年度から江夏由樹特任教授を室長として、一橋大学創立 150 年史編纂準備室が小平キャンパスに設置され準備をスタートすることとなった。創立 150 年史準備作業を密接な連携のもとに行う必要がある。

編集後記

『一橋大学創立 150 年史準備室ニューズレター』創刊号には、斎藤修、西沢保両名誉教授からのご寄稿をいただき、江夏由樹室長の原稿と学園資料室からの報告 2 本を加えて、編集を終えることができた。ニューズレター発行の企画と編集・校正には桑原孝行附属図書館学術情報課長代理と藤村涼子社会科学統計情報研究センター資料室員の協力を受け、印刷には附属図書館のオンデマンド印刷サービスを利用した。ここに関係者への感謝の意を心から表しておきたい。

一橋大学学園史資料室は、「学園史刊行の歴史」でも述べたように「創立 150 年までの学園史関係資料の収集」のため存続しているが、その設置基盤は脆弱である。平成 18 年 7 月 12 日に学園史資料室長でもあった斎藤修附属図書館長は部局長懇談会において以下の参考に掲げた「一橋大学における大学アーカイヴに関する基本的考え方」を披露、説明し、当時の部局長たちからも特段の異論はなかった。この文書は、現在でも学園史資料室の精神的支柱となっていて、ここに掲げられた 3 つの役割を備えた室に少しでも近づけるよう努めてきた。

平成 26 年 4 月には、一橋大学創立 150 年史準備室が小平キャンパスの研究保存図書館内に設けられ、附属図書館長から江夏由樹特任教授が準備室長に命ぜられた。一橋大学創立 150 周年までには既に 10 年しか年数はない。『一橋大学創立 150 年史準備室ニューズレター』の創刊が、将来の大学アーカイヴへの道のりのターニング・ポイントとなれば幸いである。（大場）

（参考）

2006 年 7 月 12 日

一橋大学における大学アーカイヴに関する基本的考え方

学園史資料室
斎藤 修

<u>現状と問題</u>

現在、本学内において大学関係資料は学園史資料として学園史資料室が収集・保存を行っている。しかし実際は、学園史資料が図書館にも所蔵されており、一元的な収集と保存の体制が欠如している。加えて、週 2 日、3 年期限のパートタイム職員しか配置されていない現状では、外部からの学園史関係の問合せに応じ、かつ系統だった収集と組織的な保存を行うことはきわめて難しいのが実状である。このような学園史資料室自体の現状に加

えて、大学関係資料全体の収集・保存に関して本学が直面する問題が存在する。

その第一は、非現用となった膨大な法人文書の処置である。この問題は 2001 年の情報公開法の施行によって、大学法人にとっても緊急の課題となった。同法へ対応するためには、文書の所在把握、目録作成、保存期間切れとなった文書の処置原則の制定等が必要だからである。にもかかわらず本学では、いまだその処置にかんする基本規則が制定されていない。

第二は、150 年史編纂のための資料保存と収集である。現在は、学園史資料室が関連資料の収集と整理を行っているが、すでに述べたように十分な体制とはいえない。上記の非現用法人文書も将来の学園史資料であるが、その受入れと保存の体制はないに等しいのが現状である。本学が 150 周年を迎えるのは 2025 年なので、まだ遠い先のようであるが、資料の収集と編纂には長い年月が必要であり、今から考え始めても決して早すぎることはないであろう。

最後に、本学には、大学の歴史とその間に収集されたさまざまな文物とを保存し、展示するスペースが整備されていない。現在は、附属図書館時計台棟 1 階にある公開展示室の一部にパネルがおかれているのみである。歴史的資料、とくに文書資料以外の文物の収集と展示は、大学のアイデンティティを涵養する思索の一環として位置づけられることが必要である。

このような諸問題の解決の一方策として近年関係者の関心を呼んでいるのが、大学アーカイヴ構想である。以下では、本学における大学文書の保存と活用に関する今後の検討のために、大学アーカイヴズとは何かを若干の実例をみることによって明らかにし、本学における大学アーカイヴに関する基本的考え方を私案として提示するものである。

<u>大学アーカイヴズの 3 つの役割</u>

大学アーカイヴズとは、狭義では文書館の意であるが、より一般的には次に掲げる 3 つの機能を備えた、あるいは少なくとも 2 つを備えた機関と定義することができる。

1. 文書館（狭義のアーカイヴ）

法人および大学の事務文書を中心に、大学の歴史に関わる記録を保存・公開する機関としての役割。

A. 組織資料（大学自らが生み出す資料）

①非現用となった法人文書

②印刷刊行物

③非公的機関資料（同窓会、学生自治会等）

④ 個人の在学中資料（学生の卒業論文、講義ノートから、教職員の大学における研究教育および行政活動に関連した私的文書まで）

B. 大学外から収集（寄贈）される資料

⑤書籍、新聞雑誌記事

⑥過去の大学に関わる種々の資料

⑦個人資料（在学前、在学後）

2. 博物館機能

記章、門標、印璽、絵画、記念品、トロフィー等、および写真、録音テープ、ビデオテープ、フィルム等の映像資料

3. 研究調査機能

それぞれの役割について若干の実例をみてみよう。

1. 文書館としては、東大と京大の例をあげよう。東京大学史史料室は 1987 年開設、百年史編集関係資料の恒常的な整理・保存を目的として設立された。室長（兼任）、教員 1（専任、事務兼任）、非常勤職員 4 の体制である。

　これにたいして京都大学大学文書館は、百年史編集関係資料の保存・利用に加えて、非現用となった文書の保存を目的に設置された、本格的な大学アーカイヴとして全国で初の試みである。2000 年に開設され、「京都大学における行政文書の管理に関する規程」には「保存期間が満了した行政文書は、京都大学大学文書館へ移管するものとする」と定められ、非現用文書は文書館が一元管理をすることとなった。 館長（兼任）、教授 1（兼任）、助教授 1（専任）、助手 2（専任）、非常勤職員 6 の体制である。

　この流れで、法人文書の受入れと整理に力点をおくようになったところには他に、東北大学、名古屋大学、九州大学、広島大学、金沢大学、北海道大学がある。

2. 博物館機能　文書館を兼ねた博物館は私立大学にみられる（大阪音楽大学、駒澤大学、東京農業大学など）。いずれも、大学のアイデンティティを涵養するうえで重要な役割を果たしている。国立系の大学は博物館を別組織として持つところが多い。

3. 研究調査機能　本格的な調査研究センターを目的に設置されたところは多くないが、慶應義塾福澤研究センターは、その英文名称 Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies が示すとおり、大学内の研究機関として位置づけられている例である。1983 年に、旧塾史資料室を発展的に継承し、新たに近代日本研究を行うセンターとして発足した。所長、副所長 2、所員 20（いずれも兼任）； 事務長、職員 2（いずれも専任）、事務嘱託 4 の体制である。

<u>大学アーカイヴ設置に向けて</u>

冒頭に述べた本学が直面する諸問題、とりわけ 150 年史編纂資料の収集と非現用法人文書の処置とに対処するためには、大学アーカイヴ設置が事実上唯一の解決策といってよいであろう。その大学アーカイヴは、本学の性格と予想される資料の量とを考慮すると、文書館機能 4、博物館機能 1 の機関とするのが望ましいと考える。

この大学アーカイヴズは、附属図書館とは別組織の、継続性をもつ機関と位置づけられなければならない。絶えず生み出される非現用文書の受入れ・保存・整理のためにも、新たな学園史資料発掘のためにも、時限の施設では機能を果たすことはできないからである。そして、先進的な大学アーカイヴズの事例からもわかるように、複数の専任の職員――アーキヴィストや学芸員の資格を有した職員であることが望ましい――が配置されるべきであろう。

以上

【 一橋大学後援会へのご寄附のお願い 】

一橋大学後援会は、昭和 31 年 11 月 28 日に文部省の認可を得て「財団法人一橋大学後援会」設立後、公益法人制度改革にあたり、内閣総理大臣から公益財団法人として移行認定を受け、平成 24 年 4 月 1 日から「公益財団法人一橋大学後援会」として再出発しています。

一橋大学後援会が行う事業には、定款第 4 条第 4 号に「教育・研究施設の拡充整備に対する支援」が定められており、そのための事業の一つとして、大学史編纂を支援する目的で寄附された基金が「特定事業費：大学史編纂基金」として設けられています。

今年度設置された一橋大学創立 150 年史準備室の今後の活動のために、読者のみなさまの浄財をご寄附いただきますようお願い申し上げます。手続等について以下にご案内いたします。

【 ご寄附のお手続き方法 】

1. 寄附申込書を取り寄せてください。

一橋大学後援会ホームページ（http://www.hit-u-koenkai.or.jp/donation/index.html）に、寄附申込書がありますので、ご利用ください

2. 必要事項を記入してください。

住所・氏名・電話番号等の連絡先、卒年、寄附の目的（大学史編纂基金にチェック）、金額等の必要事項を記入の上、郵送か FAX もしくは電子メールで申し込み下さい。

寄附申込書の送付先：〒101-0003　東京都千代田区一ツ橋 2-1-1
一橋大学後援会事務局資金部(如水会事務局内)
FAX: 03-3262-2150　e-mail: kifu-moshikomi@hit-u-koenkai.or.jp

3. 最寄の金融機関へのお振込みをお願いします。

いずれかの金融機関をご利用ください。

口座名義：ザイ）ヒトツバシダイガクコウエンカイ

三菱東京 UFJ 銀行	神保町支店	普通	1374919
三井住友銀行	神田支店	普通	6408813
みずほ銀行	九段下支店	普通	1119378

なお、一橋大学後援会へのご寄附に対しましては、税制上の優遇措置が受けられます。

一橋大学後援会は、公益財団法人の認定を受けており、個人または法人からの寄附金について、所得税、法人税及び住民税の優遇措置として課税対象から除かれることが認められています。

また、一橋大学後援会は、個人の所得税及び住民税に対して、税額控除の認定も受けております。詳しくは一橋大学後援会ホームページをご覧ください。

（http://www.hit-u-koenkai.or.jp/donation/tax-remissions.html）

一橋大学創立 150 年史準備室ニューズレター　No.1

2015 年 3 月発行

編集発行　一橋大学創立 150 年史準備室
〒187-8587
東京都小平市学園西町 1-29-1 小平研究保存図書館

連 絡 先　一橋大学学園史資料室
〒186-8601
東京都国立市中 2-1
Tel: 042-580-8292　Mail: gen-kb.g@dm.hit-u.ac.jp